

体に刺青を入れたのは十歳の時だ。

全身を彫るのにまず全裸になる。彫刻刀で皮膚を削り、墨を入れる。何より手先の繊細さと細心さが要求される施術は気が遠くなるほど長時間にわたり、しまいには精も根も尽き果てた。

施術した人間の顔はおぼろげにしか覚えていない。

皮膚を切り刻まれる激痛に頭の芯が鈍く痺れ体の芯を熱におかされ、目に映る光景すべてが歪んでいた。

施術した人間は組織が飼っているプロの彫り師で腕は超一流だが、皮膚を刻む際に拷問の如く身を苛む激痛を癒せるわけもなく、途中何度も失神寸前まで追いこまれた。

痛かった。ただ痛かった。

身を苛む純粋な激痛を堪える為に血が滲むほどに唇を噛んで悲鳴を殺し苦鳴を漏らし、強く強く手に握り締めた布をただひたすらに掻き巻く。溺れる者が藁をも掴む必死さで一途に無心に縋るものを求めて。固く目を瞑り涙腺を引き締めても自然と涙が零れ、汗と一緒に口から滴った。背中にのしかかるのは大人の手。

情弱な甘えも微かな抵抗も許さず後頭部を押さえつけ、がちりと肩を固定する非情な手。

涙で臉を濡らして身近に目を凝らせば、裸の肩を抱擁した腕には刺青が彫られていた。

今、自分を裸に剥いて容赦なく床に這わせているのはよく日に焼けた逞しい腕だ。筋骨隆々という形容がよく似合う大人の男の腕、どれほど暴れても振りほどくことなど到底無理な強靱な握力。その腕に彫られているのは雄雄しい龍うせた龍の刺青が、肘から手首にかけ見事に表現されている。

野蛮な生命力に満ち溢れた半面毒々しく照り映える緑の鱗一枚一枚に神格を帯びた、人から畏怖される伝説上の生き物。

許される限り身をよじり、後頭部の手を見上げる。

その手にもまた、刺青があった。むきだしの肩の付け根から手の甲にかけて、龍の刺青が。

『少しくらい我慢しろ』

耳に吹き込まれる吐息。思考力を奪い去る呪詛。

『これは儀式なんだ』

『俺たちの仲間になる儀式』

『お前を正式に同志として迎え入れるため、勇氣と忠誠心を証明する儀式』

『同志の証の龍の刺青を彫る儀式』

『刺青の大きさや入れる部位は組織への貢献度や成した功績によって違ってくる。俺はな、テロ弾圧政策を可決しようとした政治家を殺つて収容所にぶちこまれ釈放された時に手柄を讃え刺青を入れた。組織への貢献度に比例して、肩の付け根から手の甲にかけて。一般人にや奇異の目で見られるから夏でも半袖着れないのが辛い。公衆浴場にも行けねえし』

『そうだな、一生半袖着れないのは辛い。闇の中でしか女を抱けないのも』

『痛みは一瞬だが刺青は一生ついてまわる。お前がどこで何をして、将来女を抱く時にも』

『光栄に思え。真正正銘最年少の刺青保持者だ。その若さで刺青もつてる奴なんざほかに見たらねえよ。ガキの全身に刺青入れるのも酷な話だよ』

『褒美だと思えよ』

『お前の功績でK I Aの知名度が一気に高まったし、政治家連中もいつ自分が狙われるかびりまくってるし。まだ皮も剥けてねえガキだろうが何だろが、優秀なやつは早く洗礼済ませて仲間にしちまえてのが上のご意向で組織の総意だ』

『一回刺青入れちまえば一生組織抜けられねえし』

他にとられるまえに、逃げられるまえに、一生消えない烙

印を体に刻め。

ここでした生きてけないように、ここ以外に居場所がないように。

決して組織を裏切らないように、裏切る気などはなから起こさないように。寧ろ極まる龍を身の内に孕ませる儀式。

激痛と恐怖を骨の髄まで刻み込み、組織への忠誠と畏怖を植えつけ、洗礼と偽り洗脳する儀式。

彫り師は口数少ない人間らしく、十歳の少年が裸に剥かれ、屈強な男に二人がかりで押さえつけられた末、布を掻き毟り身悶える痛ましい光景にも微塵も動じず、背中に燻し銀の切っ先を添える。

健康的に日焼けしたなめらかな裸の背中に、彫刻刀が添えられ、そして――

『！――っ、はあっ』

小刻みに、小気味よく。

一定のリズムで拍子をととり、木の皮を剥ぐように背中に彫刻刀を入れれば、苦痛の極地とも恍惚の官能ともつかぬうめき声がたまらず漏れる。彫り師は手際良く無表情に、苦悶に歪む少年の顔にもおかまいなしに彫刻刀を打ちこむ。痛い。鼻水と涙を垂れ流し、みつともなく泣き喚け少しは気がラクになるのだろうか。全身で暴れて慈悲を乞えばこのいつ終わるともしれない拷問から解放されるのだろうか。

しかし泣けない。情けない。

祖父は、頑固で偏屈で人嫌いの祖父は、唯一の肉親でもあり家族でもある孫が人前でみつともなく泣き喚くのを許すだろうか？ 痛みを我慢できず、狂ったように身悶えし、「許してくれ助けてくれ」と涙ながらに訴えるのをよしとするのだろうか？

―許すわけがない。拳骨を落とされるに決まってる。

祖父の背中にも龍の刺青がある。一緒に風呂に入ったとき、この目で見た。確認した。幼い頃から何度も何度も。両親の体のどこかにもまた、祖父とおなじ刺青が、自分を押さえ付けて抵抗を封じる男の腕とおなじ刺青が存在したのだろう。両親も祖父も組織の人間なのだから、組織に飼い殺しにされた人間なのだから。祖父の背中を思い出す。ずっと昔、もう記憶も霞むほど昔、自分をおぶってくれた背中を。両親がいらない寂しさに駄々をこねて泣けば、祖父は自分をおぶってあやしてくれた。あれはまだ三歳かそこの頃か、五歳をこえて泣けば「やかましい」と殴られたからあの頃はずいぶんと広く逞しく感じられた祖父の背中也、今やすっかり老いた。

最後に風呂に入った時に目撃した祖父の皮膚が縮み、弛み、

背中一面の龍も色褪せて生彩を欠いていた。それが、なんだか哀しかった。

祖父の老いを痛感させられたようで。祖父の死期が迫ってるのを思い知らされたようで。

張りりと艶のある皮膚にこそ鮮烈に映える刺青には子供心に憧れていた。若く潤いのある皮膚でこそ際立つ彩り豊かな刺青、祖父とおなじ刺青、両親にもあつたという刺青。

生まれてこのかた家族そろつたことがないから、家族そろつて何かを共有するのに漠然と憧れていた。

祖父とそろいの刺青なら悪くないとも、楽観的に考えていた。

刺青を入れるのを祖父に無断で請け負つたのは、心の片隅でどこか憧れていたからだ。祖父以外の人間の刺青を見たこともある。

祖父と親しく頻繁に家を訪れていた人間が酔つた勢いで袖をからげ得意げに見せてくれたのだ。

それを知った祖父は何故か激怒し、「んなつまらんもん見せるな」と履き物を投げて知人を追い返したが、その理由が今は理解できる。

祖父は娘の忘れ形見であり、唯一の肉親たる孫に自分と同じ道を辿って欲しくなかったのだ。

まっとうに生きてほしかったのだ。

体に刺青なんか彫るな、組織になど入るな、自分の真似をするな憧れるな爆弾作りに手を出すな。孫が組織に目をつけられ利用されていることを祖父は深刻に気に病んでいた。組織とは縁を切れ、手を切れ、おまえはワシや娘夫婦のぶんまでまっとうに生きろと口を酸っぱくして言われたのを、祖父が説教する気力も失くしすっかり老け込んだ今になって懐かしく思い返す。

不孝やな、俺。

とんでもない不孝者や。

不孝なだけやなくて、虫がいい。

祖父の説教が聞けなくなった今になって、頭を張り飛ばされなくなった今頃になって、しわがれた怒鳴り声が懐かしくなるなんて。また、どつかれとうなるなんて。

熱に浮かされた頭が朦朧とし、視界が霞んで意識が遠のく。布に取り縋った手から力が抜け、ぐったりと四肢が弛緩。

『さすがに無理か』

『もたねえだろうな、麻酔もなしじゃ』

『氣イ失ったほうがラクだないっそ。目が覚めりや晴れて組織に仲間入りだ』

『俺たちの仲間として認められるんだ』

肩を掴んだ手の持ち主が、耳元に口を近付け祝福する。

『オシヨスムニダ、同志』

「ようこそ、同志」。

『オシヨスムニダ、同志』

後頭部の手の持ち主が、そっくり同じ台詞を復唱する。体を責め苛む激痛に意識が果てる寸前、瞼の裏に思い浮かべたのは祖父の面影。顔の上半分のゴーグルにさえぎられて表情は見えないが、何故だか祖父に「しょうもない奴やな、ホンマ」と言われた気がした。

『しょうもない奴やな、ホンマ』

夢じゃない。声は現実にした。

意気消沈した呟きに正気に戻り、跳ね起きる。いつのまに敷かれたのか、自分は布団に寝かされていた。激痛に失神した自分が敷けるわけがないから、自分をここまで運んだ人間が祖父が手ずから敷いてくれたのだろう。

『何日も帰ってこないから、どこほつき歩いとるんやあのおほんだらて腹に据えかねてしょうもないことばかり考えてもうたわ』

布団の傍らに正座した祖父が呟々と語る。深い皺が寄った顔に苦渋を湛え、痛ましい眼差しで。

祖父が心配するのも無理はない。

刺青を彫ってやるとそのかさされ、ふらりと家を出たきりずっと音沙汰なしだったのだから。

『……女と駆け落ちしたかと思った？』

冗談めかして聞けば、途端に頭をはたかれる。祖父に頭をはたかれるのも随分と久しぶりだ。昔は悪戯するたびに手加減なくはたかれたものだが、最近ではばったり孫に手を上げなくなつて少し物足りなく感じていた。

『アホ言えませガキ。十歳のガキに手え出す物好きがどこにいる、家出と勘違いして氣イ揉んだだけや』

『冗談やのに、そんなに怒ることないやん』

苦笑いとともに頭をさする。祖父は日本にいた期間が長く、家ではこうして日本語を話していた。正確には標準語ではなく、どこかの訛りが入つてゐるらしいが、祖父譲りの日本語しか知らないからよくわからない。

成人した後、妻子を伴い渡つた祖国の言葉より生まれ育つた国の言葉が得意な祖父が、じつと物言いたげに孫を見つめている。どこか思ひ詰めた眼差しで、もう引き返せないところまで来てしまつた人間特有の哀切な眼差しで。

『……入れてもうたんやな』

『ああ』

何を言われてるかすぐにわかつたから、なるべくそつけないく頷いてみせる。

『身内に何の相談もせず親から貰つた体に傷つける不孝モンがどこにおる』

『ここにおる』

『どつくとど』

『痛つ、どついてから言うの卑怯や。……だつて正直言うたら怒つたやろ、絶対』

『あたりまえや』

体はまだだるい。体の芯で熾火が燦つてゐるようだ。体の節々が痛むのは皮膚の炎症のせいだろうか。いつのまに着せられたのか上半身にはTシャツを羽織り、下にはトランクスを穿いていた。何気なく毛布を剥ぎ、トランクスから突き出た足を見下ろす。

尖つた膝小僧と華奢な脛、腕白な少年の足。

しよつちゆう筆筒の角にぶついたり転んだりしてるせいですり傷が絶えない見慣れた足がそこにあるはずだった。

しかし、現実には布団に投げ出されていたのは。

毒々しく照り映える緑の鱗が螺旋状に巻き付いた足。

『……ああ』

終わつたんや、と呟く。拷問から解放された安堵に浸かりながら、何かを得て何かを失つた虚脱感とともに。祖父のもとを離れてからどれくらい監禁されていたのか正確な日数はわからない。一昼夜、いや、一週間かそれ以上か？わからない、判然としない。体力が果てるまで付つきりで刺青を彫られてるあいだ、霞がかかったように頭が朦朧と

してここがどこで自分が誰かもわからなくなっていた。入れかわり立ちかわり誰かに肩を押さえつけられ、入れかわり立ちかわり監視されていたように思う。

周囲に何人の人間がいたのか、それすらも漠然としか把握できなかった。

自分を押さえ付けていた人間が二人、彫り師が一人、その助手が一人、監視役が二人か三人の嚴重体制……そうだとにかく水が飲みたかった。喉が乾いて仕方がなかった。しかし身動きすらできなかった、少しでも動けば手元が狂うと叱責されさらに強く押さえつけられた。肩が軋むほどに、万力で容赦なく締め上げる拷問のように。

もう終わったんや。

全身が微熱をおびたように火照っているのは、体に彫られたばかりの刺青のせいだ。墨が肌に馴染むまでもうしばらく時間がかかる。余熱を持て余して気だるい体を抱きしめれば、祖父の呟きが耳に聞こえる。

『ホンマにアホやな』

大袈裟にかぶりを振り振り、ため息まじりに嘆く祖父にちゃんと反感をおぼえる。あんなに痛い思いを味わったのに「アホ」の一言で片付けられては自分の苦勞が報われないではないか。祖父へと向き直り、肩の付け根まで袖をめくりあげる。

あらわになった腕には一匹の龍、鱗一枚一枚が艶やかに照り映える躍動的な刺青。

『どや、かつこええやろ。じつちゃんとおそろいや』

「じつちゃんとおそろい」という言葉にはどこかこそばゆげで、かつ自慢げな響きがあった。確かにそれは祖父の背中に彫られた刺青をそのまま腕に移植したようにも見えるが、自分の場合は背中だけでなく全身に及んでいる。肩にも背中にも胸にも腹にも腰にも太股にも脛にも足首にも、四肢に巻きつくように巨大な龍が棲みついている。この刺青が完成するまで途中何度も失神した。激痛のあまり半狂乱で絶叫して意識を手放したが、その甲斐あって満足行く出来映えに仕上がって……

『入れてもらったんや、刺青。腕だけやない、体中にも。肩にも背中にも胸にも腹にも腰にも太股にも脛にも足首にもあるんやで。すごいやろ、今度風呂に入ったとき見せたる。ちよーと痛かったけどな、済んでもうたいたいしたことない。おかんとおとんにもおなじ刺青あったんやろ？ 家族揃って体に刺青でなんか格好ええな、極道家族や。じつちゃんが親分やな、きつと。いっつも眉間に皺寄せてぎよろ目剥いたおっかない顔してるもん……』

むきだしの腕を祖父の眼前に突きつけ、何かに憑かれたようにまくしたてる。うしろめたさをごまかすように、虚勢

を張って。八重歯を覗かせた人懐こい笑顔で。

『格好ええやろ、じっちゃん』

祖父に誉めてもらいたくて、せっかく刺青を入れたのに。家族に自慢したくて、歯を食いしばって痛みに耐えたのに。

『なんで泣くん』

頑張って痛みを堪えたのに、全身に刺青を入れたのに、そうまでして祖父の口から引き出そうとした称賛の言葉は聞けず、祖父は深々と顔を伏せ肩を震わすばかり。嗚咽もあげず、膝の上で握り締めたこぶしを涙でぬらすばかり。

これで組織の一員だとか、晴れて同志として認められたとか、そんなことはどうでもよかった。二の次だった。ただ自分は祖父に誉めてもらいたくて、誇りに思ってたほしかっただけだ。

自分にとって祖父がそうであるように――

祖父は無言で涙をこぼし続ける。決して孫の顔は見ず、頑固に俯いて。

そんな祖父によりきつたように眉を下げ、少年はぼつりと呟く。

『……後生やから、誉めたつてや』

祖父が他界したのは、その一ヶ月後だ。

形見のゴーストを孫に遺して。

頭が痛い。二日酔いだ。

「いつてー……」

目を開けた途端、こめかみに疼痛が走る。錐で貫かれる激痛にたまらず奥歯を食いしばり、苦鳴を殺して上体を突っ伏す。ちよつと体を動かすだけでガンガン頭に響く。

ああ、酒は十五までやらないって決めてたのに畜生。残酷兄弟はじめ凱の子どもときたら調子に乗って無理矢理俺にウイスキー飲ませやがって……凱そつくりの性格の悪さだ。

昨夜の記憶はおぼろげだ。どう頑張ってみても何があったか正確に思い出せない。俺が覚えてるのは鍵屋崎を助けにいつてタジマに体当たりして張り飛ばされて手錠につながれてやられかけ、休憩がてら引き上げてきた凱の子どもには鞭でしばかれるはさんざんな目にあつて……

それから何があつた？ くそ、思い出せねえ。

ずきずき疼くこめかみを指で揉みほぐし、記憶を掘り起こそうと目を瞑る。

……駄目だ。記憶を反芻しようとするほど頭痛が悪化していったん思考を放棄、毛布をはねのけて素足を床に下ろす。ひんやりと冷たいコンクリートの床、裸の足裏に直に感じるざらざらした質感。無造作にベッドの下に放りこんでいたスニーカーに踵をもぐりこませながら、俺の酒

癖の悪さはお袋譲りだなと妙な感慨をおぼえる。別にまったく嬉しくはない、どころか迷惑な話だ。遣伝子の皮肉というか何というか、俺は似たくないところばかりあの女に似ちまう。顔しかり酒癖の悪さしかり。

酔っ払ったお袋が手当たり次第に物を投げて俺に当り散らす光景を懐かしく回想する。飛んできた灰皿で起こされてたガギの頃が懐かしい。アル中一步手前、現実逃避に酒に溺れ男に溺れて一度も実の息子をかえりみることもなかったお袋のことを刑務所の中でもいまだに忘れられないなんて女々しいやつだ、と束の間自嘲に浸り、スニーカーを履く。

ふと隣のベッドに目をやればレイジはどこに行っただかもぬけのからだだった。

俺が起床するまでぐっすり寝入ってるやつにしちや珍しい。毛布が中途半端にはだけたからつぼのベッドを漠然と眺めるうちにいやな胸騒ぎに襲われる。

脳裏に朦朧とよみがえる昨夜の光景。

銀の金網に囲われたリングにて対峙するレイジと凱。凱を絞め殺そうと手を伸ばすレイジ、その顔には残酷な笑み。

俺がいちばん嫌いな種類の、人の命なんかどうでもいいと嘲る笑顔。

レイジは凱の首を絞めた。俺の目の前で、俺の目を意識し

て。

それからどうなった？ 決着はついたのか？

……答えはでない。記憶はそこでぶつりと途切れている。

頭の底をさらってみたところで、気紛れに浮上してくるのは断片的な記憶のみ。レイジは勝ったのか？ 凱は殺されたのか？ —わからない。レイジが凱ごときに負けるはず

がないと信じたいが、大観衆の注視を浴びたレイジが例の微笑を湛えて凱を絞め殺してしまったのだとしたら……

はげしくかぶりを振り、不吉な想像を追い散らす。

俺は凱が嫌いだ。大嫌いだ。ぶっちゃけこの手で殺してやりたいくらい憎いし今すぐに凱が死んでくれりや万歳して快哉上げたいが、レイジが人を殺すところは見たくない。

レイジとはそれなりに長い付き合いになるが、何やってぶちこまれたのか、何で東京プリズンに来たのか詳しくは知らない。気にならなくもないが、どうも聞き出すきっかけが掴めないのだ。砂漠のど真ん中の刑務所に隔離されたからには複雑な事情があるんだろうし、本人が触れられたくないなら今までどおり無視してやったほうがいい気がする。実際俺も自分がぶちこまれたワケについてはできるだけ触れたくない。ガギの抗争で米軍払い下げの欠陥手榴弾を投げて人殺しましたなんて自慢できるほど俺の神経は凶太くない。

レイジは外で人を殺したのかもしれないし、それ以外の犯罪をやらかして東京ブリズン送致が決定したのかもしれない。どういう経緯だか不明だが、本で人を殺せる技術を身に付けたレイジが外で殺人を犯してない可能性は限りなく低い、それでもやつぱりレイジが人を殺すところは見たくない。

『笑うから殺さないでください』

唐突に耳によみがえるのは、いつか聞いたレイジの寝言の翻訳。レイジは普段馬鹿っぽく振る舞ってるがアレで実は結構頭がよくて日本語もべらべらだ。けど寝言で英語をしゃべったつてことは、外では日常会話として普通に英語を使ってたんだろう。本人いわくフィリピン出身らしいし、フィリピンといや米軍占領以降英語をしゃべってる国。第二次ベトナム戦争が始まってから生まれたレイジが無意識に英語を口走ったところで不思議じゃない。

物騒なのは、その内容だ。

「笑うから殺さないでくれってどんな状況だよ一体」
今ごろになって、レイジの寝言の真意が深刻に気になりだす。

いつもへらへら笑ってくだらないこと言って人からかつて

るレイジが、「笑うから殺さないでくれ」と懇願した。びつしよりと寝汗をかいて、悪夢にうなされて、俺の知らないだれかに哀願した。だれに？ 笑うから殺さないでくれ、なんて何だか矛盾してる。謝るから許してくれとか何でもするから殺さないでくれならまだ話がわかる。でも、「笑うから殺さないで」？ 無理にでも笑わないと殺される状況ってどんなんだよおい。ちよつと悔しいが、俺には全然想像できない。鍵屋崎に相談したら「想像力が欠如してる」と指摘されそう。

鍵屋崎。そうだ鍵屋崎だ。

あいつ、あれからどうなったんだ？ 俺がボイラー室に殴りこんだときやタジマに首絞められてたけど、大丈夫なんだろう。一夜明けて顔を見てない鍵屋崎の心配をしながら洗面台に行き、鏡に映し出された自分の格好にぎよつとする。

「……ひでー格好だ」

開口一番の感想がそれだった。

亀裂が入った鏡に映し出された俺はかなり悲惨な格好をしてた。垢染みた囚人服の上着はあちこち破け、包帯を巻きバンソウコウを貼った肌が覗いてる。上着だけじゃない、ズボンの膝も太股も裂けて擦り傷ができていた。ゲンギンなもんで、姿見で怪我を確認した途端に体中の傷が疼き出

す。くそ、残虐兄弟め。心ゆくまで人のこと鞭で撻つてくれやがって、この落とし前はいつかきつちりつけてやる。はらわた煮えくり返して蛇口を捻れば勢い良く水が迸る。両手に受けた水を三度顔面に叩きつければ少しは頭がすつきりした。水の冷たさを心地よく感じながら上着の裾で顔を拭き、習慣で蛇口を締める。

生き返った。

『Good morning, Long.』

背後に流れたのはなめらかな英語。反射的に振り向けば、開け放した房の扉に凭れてレイジが立っていた。いつのまに扉を開けたんだかちつとも気付かなかった。その必要もないのに気配を消して接近するなんざ忍び足で獲物を狩りにくる豹より始末が悪い。

「めずらしく今日は早起きじゃねーか。早朝の散歩でも行つてたのか」

上着の裾で顔を拭きながらからかえば、レイジがスツと房に入ってきた。ボタンと扉が閉じ、レイジがこつちに歩いてくる。片手に抱えてるのはトレイと飯。飯？ 食堂から運んできたとおぼしきトレイを俺のベッドに置いたレイジがあきれたふうにかぶりを振る。

「なにが早朝だよ、もう昼だつての。今の時間まで呑気に爆睡してんのはおまえだけ、他の連中はみんな強制労働に

出払つちまったよ」

「は……!? もうそんな時間なのか」

どうりで廊下がしんとしてると思つた。周囲の房からも物音が聞こえてこないし、何より集団生活の朝に特有の喧騒の活気が微塵もないじゃないか。

こんな時間にはつつき歩いてるのはブラックワーク上位常連で強制労働免除特権ありのレイジかその同類くらいのもんだ。

「ルームサー비스もつてきてやつたぜ。俺も損だよな、てんで報われない女に貢いでてんで懐かない猫に甲斐甲斐しく餌付けして、恋煩いのピエロかよ」

「だれが猫だ。女とも比べるな」

恩着せがましいレイジに憎まれ口を叩きつつ、遅い朝食を有り難く頂戴する。実のところ二日酔いであんまり食欲がないんだが、飯を粗末にしたらバチが当たる。今日の朝飯は和食、ワカメの味噌汁と白米の飯とあじの開きにナスの漬物という何の変哲もない育ち盛りには物足りない献立。

ああ、台湾料理が食いてえ。

二日酔いには味噌汁が効く。味噌を節約したせいで殆ど味がしない味噌汁を啜れば、対岸のベッドに腰掛けたレイジがじつと俺を見てる。

「？ なんだよ」

箸を片手に聞けば、鼻白んだレイジが声を低める。

「おまえ、昨日のこと覚えてないの？」

「覚えてるよ。凱の子分どもにとっつかまって酷い目に遭わされた」

忘れられるわけがない。服もあちこち破けてるし、第一まだ体中が痛いのだ。

「今度は俺が質問する番だ。結局試合どうなったの、おまえの勝ち？」

「絶頂期のマイケル・ジョーダンにスリーポイントシュートできますかって聞くれえわかりきったこと聞くなよ」

「たとえが意味不明だけど、勝ったんだな？」

箸を持って念を押せば、片手で頬杖ついたレイジがいたずらっぽく微笑んでみせる。

「俺が負けるとこ想像できる？」

……愚問だった。

「凱は生きてるのか」

「絞め殺そうとしたら邪魔が入った。惜しかった」

「だれ。鍵屋崎、サムライ？」

「本気で言ってるのかよ」

レイジが大袈裟に手を広げてみせる。俺には意味がわからない。ボイラー室に閉じ込められてから先の記憶が酒のせいであやふやなのだ。顔を掴まれ口をこじ開けられ、強引

に喉に流し込まれたアルコールの灼熱感がまざまざとよみがえり再び吐き気をもよおす。

ガキの頃からさんさん酒かつくらつちやあ荒れまくるお袋を見てきたから、十五になるまで酒はやらないと心に固く誓ってたのにこのザマだ。酒が入るとぶつり記憶が飛ぶなんて始末におえない。

とりあえず、レイジが凱を殺してないとわかってほつとした。試合にも余裕で勝てたみたいだし、俺が心配することなかったな。もう全然。

安堵に胸撫で下ろした矢先、レイジがまっすぐに俺を指さす。

「凱の命の恩人」

は？

「試合に乱入して俺の出番かつさった張本人が一夜明けて記憶喪失なんぞ洒落になんねー」

味噌汁を吹きそうになった。

「ちよ、ま……まてまて、たんま、話を整理しよう。昨日俺が何したって？ 試合に乱入して凱助けたって本当かよそれ、てきとー言ってまた担ごうとしてるんじやねえだろな？」

「同僚の相棒疑うなんてあんまりだ、ルームサービスまでしてやったのに何でこんなに信用ないかね。黄金の心臓の

王様だつてさすがに傷付くぜ」

「前に寝ぼけた俺に『今日は避難訓練だ！ 頭に水かぶつて廊下にでろ、早くしねえとボヤに巻かれて死ぬぞ！』つて吹きこんで笑ひ者にしたのでだよ」

「あー、あれは笑えたな。最高だった、おまえ面白すぎ。寝起きのロンいつも以上に可愛くていつも以上にからかいたくなるんだよな。貞操守りたいなら俺以外の男に寝顔見せんよ、心広い王様は特別にキスだけで許してやる」

「話をすりかえるな」

一気に飲み干した味噌汁の碗をトレイに置き、正面に身を乗り出す。心臓の鼓動が速まり腋の下がじつとり汗ばむ。膝の上でこぶしを握り締め、冷や汗をかきつつ質問。

「……レイジ。俺、昨日なにやったんだ？」

自分で覚えてないなら他人に聞くつきやない。

酔っ払った俺の一部始終を見届けた口ぶりのレイジに恥を忍んで真相を問えば、レイジときたら悩ましげにため息なんかつきやがった。男の癖に長い睫毛が、伏し目がちの目を物憂げに翳らせる。

「覚えてないのかよ。本当始末におえねえな。ギャラリーの前であんな大胆なこととして、」

「大胆なこと？」

「あんな大胆な発言して」

「大胆な発言？」

「しまいいは脱いで」

「脱……………!？」

愕然とした。

そんなまさか冗談だらなにやってんだ俺、公開ストリップショー!? いやいやいや、いくら酔っ払ってたからって俺がそんな馬鹿な真似するわけねえレイジの吹かしに決まつてる事実であつてたまるかつてんだ。

青褪めた俺を眺めながら、片腹をくすぐられるみたいな愉快さを噛み殺した口調でレイジが続ける。

行儀悪くスニーカーも脱がずにベッドに飛び乗り、だらしく足を崩し、全開の笑顔で。

「酔っ払ったロンが試合に乱入して俺と凱の一戦台無しにした時は焦ったけど、その後地下停留場を埋めた何百何千のギャラリーの前で大胆告白。『レイジ、おまえが好きだ』『おまえになら今この場で、東京プリズンの全囚人が見守る中抱かれてやってもいい』と宣言して俺の腕の中にとびこんできてキスを、」

皆まで言わせずレイジの顔面にトレイを投げつける。食器は懷に確保して。

「それらしい作り話してんじゃねえ、鳥肌立ったろうが!! いくら俺が酒飲んで正気なくしたからって自分からてめえ

にキスするなんてありえねえ、絶対ねえ！ おまえにキスするくらいなら鍵屋崎にキスしたほうがマシだっ」

「俺とタジマなら？」

「あじ投げるぞ」

「冗談だよ」

レイジがおどけた態度で両手を挙げて降参を表明する。顔面にトレイを食らったのに涼しいツラしてるのが憎たらしいっちゃない。ナスの漬物はよけ、先にアジに箸をつける。手先が不器用なせいで骨が巧く取れないのに苛立ってしまいいは骨ごと噛み砕こうと頭を口に持ってけば、野良猫のゴミ漁りでも目撃したように微妙な顔のレイジが口を開く。

「ロンさ、とりあえず肌隠しとけよ。そんな格好でふらふら出歩かれたんじゃ心臓に悪い」

ベッドから立ちあがったレイジが俺の膝の上で五指を開けば、ばらばらと銀の光沢の安全ピンが降ってくる。ベッドに散らばった安全ピンに意味不明と眉根を寄せれば、レイジが嘆かわしげにかぶりを振る。

「タジマが警棒さがして這いつくばってたときに落としたらしい。それで破れた個所留めとけよ、応急処置に」

合点した。これはタジマの安全ピンか。理解した瞬間に耳たぶを安全ピン刺し貫かれる恐怖に身が竦んだだが、レイジの言い分も一理ある。こんな格好で外出歩けば露出狂だ

と誤解されかねないし、第一風邪をひいちまう。いったん箸を置き、手にした安全ピンで破れた個所を留めて補修する。幾つかの安全ピンで裂け目を縫いとめて応急処置を完了すれば、服を繕った俺に満足したらしくレイジが鷹揚に頷く。

「……しっかし、こんな大量の安全ピンどうするつもりだったんだタジマは。想像するだけで気分が滅入る」

「安心しろ。当分タジマの顔見なくてすむよ」

「？ どういう意味だよ。今まで積み重ねた悪事がバレてクビになったのか」

「あはははは！ ギャララーが見てるまえでタジマのS Mクラブ通い暴露してマゾな性癖さらした東京プリズンの女王様がよく言うぜ」

「……俺、本当になにやっただ。」

自己嫌悪からくる頭痛が悪化して頭を抱え込んだ俺を見下ろし、レイジが柔らかく呟く。

「でもさ、ちよつと嬉しかったぜ」

「俺がタジマの性癖暴露して晒し者にしたからかよ……」レイジの話じゃ晒し者にされたのはむしろ俺だ。記憶にはないが、試合に乱入して酒臭い息吐き散らし、囚人監視のリングの上でさんざんタジマを罵ってる自分を想像し、ただでさえ二日酔いで滅入ってた気分がどん底まで落ちこむ。

「ちげーよ。俺が言ったのは、」

何か言いかけたレイジが口を嚙む。苦いものを飲みこんだように口をむずむずさせたレイジが照れ隠しに舌打ち、遅い朝飯中の俺をベッドに残し足早に扉に向かう。

「それ食ったら俺と来い。紹介したいやつがいる」

「はあ？ だれだよそれ、俺が知らない南のトップとかじゃねーだろな」

突拍子もない提案に驚く俺を振り向き、いつもの調子を取り戻したレイジがノブに手をかけ、扉を開く。

「酔った勢いでベア戦参戦表明したどこかのロンを鍛え直してくれる心強いコーチだよ」

レイジに案内されたのは展望台だ。

「いい天気だなあ」

気持ち良さそうにのびをしたレイジにつられて空を仰ぐ。雲ひとつない快晴の空が砂漠の涯てまで広がってる。東京プリズン周縁の砂漠の遙か彼方、墓標の蜃気楼のごとく灼熱の大地にぼかされてるのは半ば廃墟と化した高層ビル群だ。

砂漠周辺には二十一世紀初頭の地震で半壊した建造物が朽ち果てるままに放置され、住処を追われたホームレスや密入国した不法就労者やらが行政の目を逃れて住み着いてる

とかで問題になってる。俺もお袋のアパートを追い出せばらくの間は路上生活をしていたが、天気が荒れ模様ときは廃墟で雨宿りしたこともある。

晴れた日は新宿がよく見える。

展望台が突き出た方角のずっとずっと先には新宿があり、新宿からちよつと離れたところには池袋がある。池袋。俺が11まで飲んだくれのお袋と暮らしたスラム街。故郷と呼ぶにはよそよそしく、いつだって俺を疎外した街。この空が新宿とつながってるなんて信じられない。あつちとこつちじや世界が違いすぎる。東京プリズンじや日常と非日常が逆転して、慣れるのに大分時間がかかった。もつともけたたましい起床ベルで叩き起こされ廊下に整列して点呼をとり集団で食堂に行きまづい朝飯をかきこむ生活にも一年もありや馴染んでしまう。すし詰めของバスで仕事先に派遣されるハードな日々が今は懐かしい。

「イエローワークが懐かしいか」

芒洋と砂漠の先を見つめてたら、俺の心を読んだようにレイジが声をかけてくる。砂塵まじりの乾いた風が一陣吹き、日に透ければ燦然と金に輝く茶髪が舞いあがる。

「……まあな」

風に髪をなぶらせるレイジの横、素直に相槌を打つ。乾燥した砂漠の風をいつもより強く感じるのは何ひとつ遮る物

とてない展望台の高所に立つてゐるからだ。風通しの良い展望台は日光浴に最適、といたいところだが容赦なく脳天に照りつける直射日光にはうんざりだ。白く発光する太陽から降り注ぐ灼熱の日差しはきつすぎる。

食後の散歩がてら展望台に案内され、しばらくふたり並び、物言わず眺望に見入る。が、だだっ広い砂漠がどこまでも延々続くだけの変化に乏しい光景にはすぐに飽きが来る。今ごろは強制労働の現場で砂掘りに精を出す囚人の姿も、この距離からじや蟻の巣穴掘りの光景に見える。で、話を戻す。

「……レイジ、おまえ俺のこと騙してゐるんじゃないやねえだろうな」

「まだ疑つてんのかよ、しつこいな。俺は誠実な男なんだ、つまらない嘘ついたりしねえよ」

「どの口が言つてんだよそれ、呼吸する自然さで嘘つくたらしがよ。何回聞いても信じらんねえんだけど、いくら酒飲まされたからって俺がそんなこと言うなんて……」

「言つたんだよ。嘘だと思ふなら他の囚人つかまえて聞いてみろよ、全員口そろえて同じこと言うよ。『昨日の試合ぶち壊した張本人がなにをいまさら白々しい』『来週の試合たのしみにしてるぜ』つてな」

レイジはしらつとうそぶくが、俺はまだ疑いを拭えない。

俺の複雑な心境も知らず、いや、知っていて尚こうなのか、隣のレイジは張り飛ばしたくなるくらい涼しいツラをしてる。

酒を飲まれたせいで昨夜の記憶はすっぱり抜け落ちてゐる。俺が昨日なにをやったかなんて全然覚えちゃいない。けどまさか、レイジ対凱の試合に乱入して酒の勢いで参戦表明しちゃうなんてまるつきり酒乱の所業じゃないか。ああ、昨日の俺を殴り飛ばしたい。殴り飛ばして正気に戻して説教したい。凱に勝負を挑むのなんて無理無茶無謀、一週間の猶予期間を与えられたところで俺にはてんで勝てる見こみがない。

凱は東棟の囚人三百人を傘下におさめる大派閥のボス、体格でも腕力でも場数でも引けをとる俺がかなう相手じゃない。

「くそっ！ 凱はそりや氣にいらねえし連中の汚い手口にはいい加減頭きてたけどよ、鍵屋崎巻きこんで参戦表明なんかして負けちまったらどうすんだよ一巻の終わりじやねえか昨日の俺の馬鹿っ」

「自分で自分を罵るマゾな趣味にひたつてゐる暇あるなら特訓あるのみだ」

「特訓なあ？」

頭を抱え込んでうずくまった俺にずっと手をさしだし、レ

イジが微笑む。

「言つたろ。いいコーチを紹介してやるつて」

「どこにいんだよ、そのコーチは」

レイジの手を邪険に払いのけて立ちあがりしなあたりを見まわす。展望台には俺たち二人以外にだれもない。レイジが無人の展望台に俺を案内した真意は不明だ。不機嫌に眉をひそめた俺にいたずらっぽい笑顔を浮かべ、展望台の突端へ足を踏み出すレイジ。

「おーい！」

レイジが大仰な動作で両手を振る。

レイジにつられ、遙か彼方の砂漠から手前の中庭へと視線を転じれば中央に人影を発見。と言っても、この距離からじゃ顔の造作まで判別できない。中庭といつても東京ブリズンのそれは全棟つながってただだっ広いのだ。中庭の真ん中あたりにぼつんと突つ立ってる人影がレイジの大声に向き直り、こつちに手を振り返す。やけにフレンドリーだ。

「あれがコーチ？」

一抹の不安が胸を過ぎる。レイジが紹介する人間にろくなやつはいない。というか、囚人の大半が強制労働が出払つてこの時間帯に居残ってる面子は限られてくる。

突き詰めれば、レイジの同類しか考えられないじゃんか。

「ちよつと待て、コーチがあそこにいるなら最初から中庭

に案内すればいいじゃんか。展望台に連れてくる意味が不明だ」

「いい天気だから風にあたりたかつたんだよ」

「……王様の気まぐれに振りまわされる身にもなれ。情けなくて涙がでる」

「なに、下りるのに時間はかかんないさ」

意味ありげに笑ったレイジが次の瞬間とつた行動に度肝を抜かれる。

「!?」

俺の視界からレイジの姿が消失。

ひょいと、何でもないことのように空気を踏んで展望台から飛び降りたのだ。

「!? おいレイジっ、」

この高さから落ちて無事ですむはずがない。レイジの身を案じ、慌てふためいて突端に膝をつき下を覗きこむ。真剣に心配した俺の眼下で繰り広げられてたのは人間離れた軽業。展望台の突端に手をかけ、垂直に聳えた壁の平面を蹴り、落下の衝撃を緩和したレイジが身軽に地面に着地。猫科の獣特有の敏捷性を遺憾なく発揮し、優雅に身をひねって地面に降り立ったレイジに呆然とする。

馬鹿げた運動神経の持ち主だ。

地面について汚れた手を軽く払い、レイジが立ち上がる。

「おまえもこいよ」

「真似しろってか？ 無難に死ぬぞ。よくて骨折だ」

額の汗を拭い、心配させられた腹いせに恨めしく呟く俺を見上げ、レイジが顎をしゃくる。

「庶民は階段を使え」

悪かったな庶民でよ。

これ以上レイジの面を見ると唾でも吐きかけてやりたくなるから大急ぎで回れ右して展望台を後にする。2、5階の高さから飛び降りる芸当などできっこない凡人は無難に階段を使って中庭に下りる。これぞ本当の無駄足だ。自己顕示欲旺盛な王様は仰天パフォーマンスを披露したいがために中庭に直行せず展望台に寄り道した可能性もあるが、いったん考え出すと腹が立つて仕方ないから思考を放棄。まあ本当に風にあたりたかったのかもしれないが、いつもへらへら笑ってて本心がどこにあるかわからないレイジの考えることなんてわかりっこない。

駆け足で階段を降り、中庭にでる。

見渡すかぎりコンクリートで足元を固めた屋外空間は灰色以外の色彩の印象がない。殺風景な中庭を突っ切ってレイジのもとへ急ぐ。俺より先にコーチに歩み寄ったレイジが振り向きがてら「遅かったな」なんてぬかしやがった。むかつく。

「俺の足が遅いんじゃないかってお前の運動神経が、」
並外れてるんだ、と反論しかけ。

こぶしの残像が視界を過ぎり、豪速の風圧に前髪が舞いあがる。誰かが俺の目と鼻の先にパンチをくれた。誰かとはレイジの横の人物で、予定では俺のコーチとなる人間らしい。来週の試合にそなえ、俺をいちから鍛え直してくれる心強いコーチは汗が匂い立つ首にタオルを巻き、手には布を巻き、ひとり黙々とシャドウボクシングに励んでいた。右から左へ、左から右へと変幻自在に重心を移す敏捷な足捌きに目を奪われる。舞踏でも踏むように軽快で律動的な足捌きに連動し、左右の腕を腋に引き付けては交互にこぶしを繰り出す。まったく隙のない構えから繰り出すこぶしは毛穴を縮ます風圧を纏い、鋭い呼吸を吐いて腕を伸縮させれば、そいつを中心に波紋が連なるように地面の砂塵が動く。

すごい。

俺もそれなりに喧嘩慣れしてるが、今日の前のこいつは「完璧」だ。フォームに一分の乱れもなく、獲物を仕留めにかかる猛獣の如く息遣いを抑制し、全身に闘志を充溢させている。極限まで無駄を殺ぎ落としたシャープな動きに威嚇

の派手さはないが、ちよつと場数を踏んだやつなら「こいつとだけはあたりたくない」と畏怖する存在感の脅威。

格の違いを肌にとびとび感じさせる、大気を打破するこぶしの威力。

「!!」

腕の軌道が途中で変化し、まっすぐこつちにむかつてくる。逃げられない、さけられない。地面から足が生えたように硬直し、目を閉じ――

顔がひしゃげる衝撃は、いつまでたつても訪れなかった。

「……?」

おそるおそる目を開ける。布を巻いたこぶしが引かれ、コーチを名乗る人物の顔が暴かれる。どこかで見た顔だ。薄らと汗をかいた浅黒い肌、細身のくせに筋肉の躍動が伝わる胸板が囚人服越しでも見えるみたいだ。のつべりと七三に分けた髪もはげしい運動のせいで乱れ、額に一房髪が落ちていた。どこかで見た顔だ。でもどこで?

混乱した俺の前でそいつは尻ポケットを探り、ゆつくりとそれを取り出した。センスを度外視した実用一辺倒の黒縁眼鏡。ホセとおんなじ……

まさか。

「改めて自己紹介を。吾輩がロンくんのコーチです」

黒縁眼鏡をかけた顔がこつちに向き直る。はにかむような

笑みを浮かべた、人のよい顔が。

紛れもなくホセだった。

「どういふことだよ、ホセと知り合いだったのか!」

ホセの隣のレイジに食つてかかれれば、俺の剣幕に首を疎めたレイジが曖昧に返事する。

「知り合いつてゆーか、」

「トツプ同士の間柄です」

レイジの語尾を引き継いだホセが何でもないことのようにさらりと答える。トツプ? 今トツプつて言ったのか?

今この場にいる人間は三人だけ、俺とレイジとホセだ。もちろん俺は庶民でレイジは王様で、他にトツプといつたら候補はひとりしか。

「おまえが南のトツプなのか!」

おもわず大声をあげてしまった。にわかには信じ難いが、今日の前にいるこいつが、トイレと間違えてボイラー室にとびこんで成り行きで俺の窮地を救ったドジで方向音痴なこいつが、東京プリズンの一角をなす南棟のトツプだなんて。トツプにふさわしい威厳が全然ないからちつとも気付かなかつた。いや、そんなもんはレイジにだつてこれっぽちもないが。辛うじて備えてるのはサーシャくらいか。

「そういうことは先に言えよ……」

一気に脱力する。冷静に考えてみりやレイジをくん付けす

る人間がただの囚人のわけない。ブラックワークの無敵覇者で名実ともに東京プリズン最強と目されるレイジにまでくん付けするのは同次元の囚人しかありえない。しかし、いちばん肝心な部分を省略した自己紹介に何の意味があるんだと恨みがましくホセを睨みつければあつからんと反論される。

「ご自分を害されたのなら失敬。しかし自己紹介で吾輩が南のトップと名乗るとはいささか自意識過剰であり僭越な誤解を招いてしまうのではないかと危惧したものですから……初対面でトップと名乗るのは『俺はバンタム級世界王者だ』『私はメキシコ美女コンテスト優勝者よ』と自慢するのとおなじ気恥ずかしさをおぼえます」

「先入観と偏見をもつてしては友情は結ばれませんし」とちやつかり付け加えるが俺には言い訳にしか聞こえない。あと断つとくが、俺はホセをダチだと思ったことは一度もない。本人がどう思つてようがこれ以上変人の知り合いを増やしたくない。

「これではつきりした。東西南北のトップは変態紙一重の変人ぞろいだ」

「そうむくれんなつて」
ぐつたりした俺の背後に回りこんだレイジが、励ましのつもりで肩を叩く。

「ホセはもと地下ボクシングの最強王者で素手で人殴り殺せるバーサーカーだ。おまえのコーチにはこいつつきやいないつて思つて紹介してやつたんだから一週間かけて特訓してもらえよ」

「レイジくんの頼みじや断れません。レイジくんには以前ワイフへ贈る手紙の書き出しの相談にのつてもらいましたし、吾輩にできることなら何なりとご恩返ししなければワイフに怒られてしまいます」

「よろしく頼むぜホセ」

「ちよつと待て、勝手に話進めんな！」

展開の早さについてけない。レイジとホセは和氣藹々と意気投合してるし。

レイジとホセの他愛ないおしゃべりに割つて入り、腰に手をついた尊大な態度で睨みを利かす。

「ホセが南のトップだつてのはわかった、俺に特訓つけるために呼びだしたつてのもまあわかる」

「じやあ何が不満なんだよ？」

理解できないといった顔で腕を組んだレイジの胸に人さし指を突きつける。

「……なんでこんなまどろっこしいことする？ ホセに話つけて俺を鍛え直すより、おんなじペア戦にでるおまえが直接鍛えたほうが早くないか」

そうだ、わからないのはそれだ。こんな回りくどいやり方レイジらしくない。ところどころ記憶が飛んでるが、酒に酔った俺が参戦表明したのはホセに引き合わされた以上事実と認めるつきやない。

でも、俺を鍛えるならレイジが直接やればいい。レイジは連戦連勝、無敵無敗のブラックワーク覇者で東京プリズン最強の男。ホセだつてサーシャだつてヨンイルだつてレイジにはかなわない、東京プリズンでぶつちぎりに強いのはレイジなのだ。人任せになんかせず直接特訓つけたほうが俺にとつてもレイジにとつても効率的だろうに。

それを聞いたレイジはしばらく腕を組んで考え込んでいたが、ふいに腕組みをほどこいて腰を屈め、そばに転がつていたバスケットボールを拾い上げる。解答を先延ばしにするよう拾い上げたバスケットボールを交互の手に投げ渡し、器用に人さし指の上で回転させる。不器用で突き指する俺には真似できない芸当だ。

人さし指を支点にバスケットボールを回しながら、レイジがどこか遠い目をして呟く。

「ロンはさ、喧嘩が強くなりたいであつて人殺しがうまくなりたいわけじゃないだろ」

さらりと述べた台詞は、ひどく物騒だ。

ぎよつとした俺の方を見ず、回転の残像をながめながらレ

イジが続ける。薄い笑みを顔に浮かべ。

「俺が教えられるのは人の殺し方と壊し方だけ。何をどうすればより効率的に致命傷を与えられるか、何をどうすれば一秒でも長く動きを止められるか。本で人殺す技術覚えなくても凱相手じゃ役にたたねーだろ？」

淡々と断言したレイジが手首を返してボールを投げてよこす。

「おまえにはおまえに合った戦い方がある」

とつさに両手を突き出してボールを受け止めたが、驚きに腰が引けたせいでボールを取りこぼしてしまった。転々と地面で弾むボールを目で追えば、素早くボールを掠め取ったレイジが再び人さし指の上で回しはじめる。

「俺を真似したところで俺以上にはなれない。なる必要もない。絶対に」

レイジは笑っていた。心なんかどこにもない、からつぽの笑顔。歪んだ笑顔から一転、いつものお気楽な笑顔に戻ったレイジが手首を跳ね上げてボールを宙に浮かせ、絶妙のバランス感覚で頭にのせる。

ボールを頭にのせた間抜けな格好で俺に向き直ったレイジが、冗談めかして軽い口調で、その実全身に殺気を漲らせて口を開く。

「ロン。俺の足手まといにはなるなよ」

魔性に魅入られた心地でレイジの目を直視する。色硝子に似て綺麗な瞳。光の錯覚で猫科の獣のように瞳孔が狭く見える目が、睫毛の下で獐猛に輝く。

「……………あたりまえだ」

決意をこめたこぶしを握り締め、挑むようにレイジを睨みつける。

「おまえこそ俺の足手まといになるなよ」

「よーし、その意気だ」

殺気を引つ込めたレイジが明るく笑い、黙って俺たちのやりとりを見守ってたホセが前に出る。

「では、中庭五十周」

「は？」

五十周？

耳を疑った俺の正面で立ち止まり、首にかけたタオルで汗を拭きながらホセが説明する。

「本当は百周にしたいところですが初日だということでは半分にまけておきます。さあ、吾輩のあとについてきて！」

「おいマジかよ、中庭がどれだけ広いと思ってるんだ!? 全部の棟つながってるんだぜ、五十周なんてしたら動悸息切れ眩暈でぶっ倒れるに決まって、」

「ヨーイドン！」

聞いちゃいねえ。俺をその場に残し、とつと走り出した

ホセの後に濛々と砂塵が舞う。何だが俺以上にやる気満々のホセに開いた口が塞がらず、呆然と立ち竦んだ俺の背後でレイジがにやにや笑ってる。バスケットボールを頭から肩に、肩から肘へ、肘から手首へと自由自在に移してはその逆もなんなくやつてのけるレイジをおもいきり睨みつけ、何ひとつ遮る物とてない快晴の青空の下、やけくそで叫ぶ。

「くそつ、走りやいいんだろ走りや!? いいさ、日射病でぶっ倒れるまで走ってやるよ！」

僕は馬鹿かもしれない。

「……………」

暑い。

じつとしてもシャツの内側に汗をかく陽気だ。曆上は冬のはずだが砂漠に季節は関係ないらしい。図書室帰りの僕は現在展望台にいる。売春班が休業状態にある現在、強制売春で身も心もすり減らして自殺未遂を図るまでに追い詰められた売春夫にはひとときの休息が与えられた。ペア戦の結果がでるまで売春夫の処分は見送り。男に犯される生き地獄の日々から解放された売春夫は束の間の憩いを満喫してる。

僕とて例外ではない。売春班にいた頃は売春通りに面した隔離房に半日軟禁状態だったが、レイジとサムライが100人

抜きを表明し安田の許可を取りつけた後はこうして読書に耽る時間もできた。他の囚人が強制労働に出払つてるせいで喧騒が絶えた刑務所内は読書に最適の環境だ。

日が高い。もうすぐ正午だ。

汗が蒸発する音さえ聞こえそうな静けさで、ページをめくる音がやけに耳につく。通常この時間はサムライが留守にした房でひとり静かに本を読んでいるのだが、こんな天気の良い日に薄暗く湿った房にこもっているのも体に悪いなと漠然と展望台に足を向けた。読書環境を変えることで気分転換を図ったのだが、今は後悔してる。東京プリズンに入所して半年以上が経つというのに、僕はまだ甘さが抜けてない。

屋外での読書は自殺行為だ。サウナで本を読むようなもので、暑さに頭が朦朧として一向に本の内容が頭に入っていないうえに体から水分が蒸発して眩暈を覚える始末だ。

しかし、一度こうと決めたことを後から翻すのは僕のプライドに関わる。

つまらない意地だという自覚はある。しかし今ここで立ち上れば、僕の判断が誤りであつたと自分から認めるようなものじゃないか。それは気に入らない。誰も見ていなく

ても僕のプライドが許さない。

「……………」

直射日光に朦朧とした頭で、意地になってページをめくる。何ひとつ遮る物とてない展望台に座りこめば当然容赦ない陽射しを浴びることになる。本のページには顎から滴った汗の染みができていた。それにしても暑い、異常に暑い。後頭部にも上着の背中にも太陽の熱を感じる。

本の内容が一向に頭に入っていないせいか、朦朧とした頭に浮かぶのは昨夜から今日にかけての出来事。

ペア戦参戦表明から一夜明けた今日は、朝から身の周りが妙にざわついていた。食堂に向かう途中、僕とすれ違った囚人がこちらを窺いながらひそひそ話をしていた。食堂の周辺席の囚人がこちらを指さしながら笑い声をあげたり眉をひそめたり、表情豊かに耳打ちをしていた。たった一晩で僕を取り巻く空気が変容し、他の囚人の態度が微妙に変化した。

軽侮から好奇へ、そして畏怖へ。

普段僕を「親殺し」と蔑んで幼稚ないやらがせをする囚人が今日は不思議と大人しく、僕を遠巻きに眺めていた。好奇の眼差しには慣れているが、食堂に現れた僕を取り囲んだそれに混じっていたのは畏怖の色。

どうやら僕の参戦表明は、周囲の囚人に少なからず影響を

及ぼしたらしい。

狩られる一方の獲物、守られる一方の弱者が強気に反撃に転じればそれまで侮っていた者たちも少しだけ、あくまでほんの少しだけ見方を改めるらしい。

もつと早く気付いてほしかった。彼ら凡人と僕は頭の出来からして違うのだから、本来尊敬されこそすれ侮蔑されるいわれはない。

だが、僕に感心した囚人ばかりではない。反感をおぼえた者や敵愾心をむきだした者の割合のほうがむしろ多いくらいだ。食事中、背中や横顔に感じた視線は凱とその取り巻き連中のテーブルからだ。朝こそ彼らも大人しくしていたが、「サムライのモノしやぶる見返りに守ってもらっている生白いお嬢ちゃんがかい口叩きやがつて」「二度とあんな口きけねえように俺のモン突っ込んでやる」と下卑た悪口を叩いてるのがしつかり聞こえた。

それに過剰反応したサムライが味噌汁の椀を乱暴に置いて席を立とうとしたが、僕が止めた。

「低脳には言いたいだけ言わせておけ。彼らはああして卑猥な冗談を口にしないと生きていけない病氣なんだ、下半身で物を考える生き物だから」と。

朝はそれだけで済んだが、今後はどうなるかわからない。何百何千のギャラリィの前で凱に恥をかかせた借りは高く

つくだろう。凱傘下の囚人三百人を敵に回し、この一週間無事に生き抜ける保証はない。

かぶりを振って憂鬱な気分を払い、ふと顔を上げれば眼下の中庭を誰かが走ってゆく。

中庭を横切る影は走者はふたり。第一走者から三十メートル遅れた第二走者は足元がふらふらで、今にも昏倒しかねない危険な状態。しかし第一走者がスピードを落とす気配は微塵もなく、差が開けば開くぶんだけ不利なのは明白。

「……炎天下でマラソンか。自殺行為だな」

自分のことは棚に上げ、見たままありのままの感想を述べる。

この距離からでは中庭を一周二周する走者の顔まで見えないが、ずいぶん物好きがいるものだ。普通の囚人は強制労働に出払っている時間帯だから、中庭でマラソンしているのは強制労働免除特権のあるブラックワーク上位陣と売春班の囚人に限定される。試みに売春班の面々の顔を思い浮かべてみたが、炎天下でのマラソンを好むような活動的な人間はいない……気がする。となれば、ブラックワーク上位者だろうか？ ありえる。ブラックワーク上位者はレイジを始めとして変人ぞろいだ。暇を持て余して突然走り出す理解不能な思考回路の持ち主がいらないとは断言できない。暇を持て余した拳句に奇妙な行動をとる人間心理は興味深

い。近くでもつとよく観察してみたい。

誤解しないでほしいが、断じてここを去る言い訳などではない。じつと暑さに耐え、コンクリートの地面に尻を熱されつつ屋外で本を読むのがいい加減辛くなつたわけじゃない。小脇に本を抱え、足早に展望台を去る。

階段を下り、中庭に到着。

一面コンクリートで足を固められた殺風景な中庭に立てば、地上に降りたぶん空が高くなつた錯覚を受ける。シャツの胸元をつまみ、内側に風を送りながら空を仰ぐ。ボールが地面に跳ね返る軽快な音が響く。

「！」

音が近付いてきた方角を振り向けばレイジがいた。

「よう、キーストア。なにやってんだこんなどこで」

「こちらの台詞だ。炎天下の屋外で何をしてるんだ君は」

「見りやわかるだろ、ひとりボール遊びでバスケットの真似事」

たしかに。レイジの両手におさまってるのは、いつだったか僕が触れたこともあるバスケットボール。強制労働終了後に中庭に來た囚人が忘れていったものらしい。

「サムライに遊んでもらえなくて寂しい？」

地面でボールを突きながら、レイジが声をかけてくる。

「サムライはブルーワークの強制労働で下水道においてい

る。君と違って暇じゃないんだ、彼は」

「ひでー言いようだな。俺は実力で今の身分を勝ち取ったんだぜ。羨ましいならお前も実力でブラックワークにのぼりつめてみるよ。二班でトップにのぼりつめるよか一班でトップ極めたほうが羨望集めるぜ」

痛いところをつかれ一瞬言葉を失うが、すぐに反撃に転じる。

「ロンに頭が上がない王様など羨ましくも何ともないな。忘れたのか？ 大観衆の眼前で赤面モノの痴話喧嘩を繰り広げた拳句にサムライと握手させられた昨夜の記憶を」

昨夜の光景を思い浮かべて失笑すれば、気に障ったらしいレイジが手首を返してボールを投げてくる。

突然投げてよこされ、反射的に胸の前で受け止めたものの危うく手首を挫きそうになる。小脇に抱えた本も落としてしまった。

「あぶないじゃないか！ 手首を痛めたら書架の上段の本が取れなくなるだろう」

「本より心配することあるだろ、食事とか下の心配とかさあ」とあきれ顔のレイジを睨みつけてボールを投げ返そうとしたが、力が足りなかったのか途中であつけなく地面に落ちてしまった。

「腕力なさすぎ握力なさすぎ」

「悪かったな。自慢ではないが運動神経は鈍いんだ」
本当に自慢にならない。

足元に転がったボールを拾い上げたレイジがおもむろに沈黙して僕の顔に見入る。色硝子の瞳で顔を凝視されるのは落ち着かない。値踏みするように人の顔を見るな不愉快だと抗議の声をあげ、

「キーストア、暇なら遊ばない？」

人さし指の上でボールを回しながらレイジが笑いかけてくる。太陽の光がよく似合う活発な笑顔。

「……遊ぶ？ どうせくだらない遊びだろう、きみがこれまで性交渉を持った女性の数と名前をあてるような著しく品性に欠けるゲームなら断固辞退する」

「俺が寝た女の数 は百五人。名前はスヨン 杏奈 シェリファ メアリー 麗羅、」

「言わなくていい、聞きたくもない。僕は帰らせてもらう」
レイジとしゃべるだけ時間の無駄だ。憤然と回れ右した僕の背中に浴びせられたのは嘲笑。

「逃げるのか」

「……………なんだと？」

逃げる？ 今レイジはそう言ったのか、こともあろうに僕にむかつて。この鍵屋崎直にむかつて。

不快に眉をひそめれば、人さし指の上でボールを回しながら

らレイジが笑う。完全に僕を馬鹿にした笑顔。

「俺に負けるのが怖いんだろ。いいよ、今回は見逃してやるよ腰抜けメガネ。レイジにいじめられたってサムライに言いつけてこいよ」

「……聞き捨てならないな。何故僕が君に負けなければならぬ？ 僕にはこのIQ¹⁸⁰の天才的頭脳と素晴らしい発想力がある。今の発言は取り消してもらおうか」

「なら勝負しろ」

「なんの勝負だ」

挑発に乗せられた自覚はある、レイジのペースに巻き込まれてる自覚もある。しかし今さら引き返せない、今引き返せばレイジの発言が全面的事実だと認めるようなものじゃないか。僕は天才だ、天才の頭脳をもつてして制覇できないゲームなどない。

そして、レイジの提案はひどく単純なものだった。

「簡単なゲーム。俺からボール奪い取ったらおまえの勝ち」

「……………それだけか」

拍子抜けすると同時に、運動が苦手な僕はひどい脱力感をおぼえる。僕の運動神経には致命的欠陥がある。少し本気を出して走っただけでも動悸息切れ眩暈で昏倒するありさまだ。炎天下の屋外でボールを取り合ったりなどしたら日射病で脱水症状を起こして……

「……いや、やっぱりやめよう。周囲を砂漠に囲まれた環境ではげしい運動は血中酸素濃度を薄める自殺行為……」

「バスケットボールもできないなんておにいちやんかつこわるーい」

理性的にレイジを説得しようとし、眼鏡のブリッジに触れた手が間延びした声に停止。バスケットボールを胸に抱えたレイジはにやにや笑ってる。完全に僕の反応を楽しんでいる。女の子の声真似までして、甲高い裏声で、僕の妹を馬鹿にするなこの低脳め恵はそんな変な声をだすものか。

頭に血が上ったのは暑さのせいではなく、目の前のこの男のせいだ。

「……いいだろう、貴様の望みどおり幼稚なお遊戯に付き合ってやる」

半年前、イエローワークの砂漠に現れた安田とおなじく「幼稚なお遊戯」を強調すれば「そうこなくつちや」とレイジがはしゃぐ。

レイジのボールを奪えばいいんだ、簡単なことだ。

いくら僕が運動音痴でも至近距離にいるレイジからボールひとつ奪うのにそう時間がかかるはずもない。腰を低め、レイジの手の中のボールに視線を集中。今か今かと息を詰めて、その瞬間を待つ。

「プレイボール!」

ゲーム開始の合図は、青空に響き渡るレイジの声。

レイジは立ち位置を動かずに右手でドリブルしていた。よし。手と地面の間で軽快に弾むボールに目を凝らし、コンクリートを蹴って跳躍。一気に接近し、ボールを掴もうとして……

「!」

目の前からボールが消失。何が起きたのだから全然わからずに振り返れば左手にボールがあった。あまりに速すぎて瞬間移動したようにしか見えなかった。驚愕に目を見張った僕をよそにレイジがドリブルを再開、手と地面の間で小気味よくボールを弾ませ。

「とろい」

「ーっ、」

人を使った笑顔のレイジに憤慨し、今度こそボールを奪取しようとして手を伸ばすが僕の鼻先で再びボールが消失。どこへ行ったのだとあたりを見回せばレイジの頭上に移動していた。レイジの頭上に手を伸ばしてボールを掴もうとすれば、頭から落ちたボールが肩から肘を経て手首に至りまた右手へと移る。右手に乗ったボールを叩き落とそうとすれば僕の頭越しに左手へと飛び移る。右左右左と残像を引いてボールを交互させつつレイジが飄々とうそぶく。

「キーストアはバスケットボールしたことないの」

「そんなくだらないことしてる暇があるなら本でも読んだほうがマシだ」

まだ十分もたつてないのに息が切れてきた。首筋を伝う汗を手で拭い、目に流れこんだ汗でぼやけた視界にボールをとらえる。レイジは殆ど立ち位置を動いてない。対して僕はレイジがボールを突くたびにぶざまに突進し右へ左へ走らされはては腕にしがみつこうとしてかわされ、無駄な動きが多いせいか体力の消耗がはげしい。

合計三步しか動いてないレイジとは凄まじい落差だ。

「俺も本は好きだけど、それってつまらない人生だな」

笑い飛ばされると思ったら、レイジの感想には真摯な実感がこもっていた。

「共感のふりなどしてくれなくても結構だ。凡人に同情されるほど落ちぶれてない」

辛辣な毒舌でやりこめれば、レイジが何故かひどく愉快そうな笑い声をあげる。まるで自分のほうがつまらない人生だったと主張するように演技過剰の笑い声。馬鹿にしているのか、これは？ 地面を蹴って加速、頭を低めた前傾姿勢から伸び上がるようにレイジの正面に立ち塞がり、右肩から右肘へと滑ったボールを掠めとろうと両腕を突き出し、僕の頭上に放物線を描き、十メートル向こうの地面にボールが落下した。

「卑怯だぞ！」

いや、見方を変えれば今はチャンスか。レイジのボールを奪えば僕の勝ち、翻せばレイジの手から落ちたボールを拾えば勝ちということだ。レイジより先にボールの落下地点に直行、ボールをにむかつて両腕を伸ばし――

転々と地面で跳ねたボールが誰かの足元にぶつかり、その人物が片手でボールを拾い上げる。

ボールを持った手につられて視線をあげれば意外な人物がいた。安田だった。

「バスケットボールをしていたのか」

「違います、『付き合わされていた』んです。僕の自発的意思じゃない」

即座に訂正すれば、僕に遅れること五秒後に駆け付けたレイジがなれなれしく安田に挨拶する。

「安田さん一日ぶり。バスケット戦にきたの？」

「そんなところだ。イエローワークの視察から帰ったら君たちの姿が目に入っただ、この暑さの中バスケットをプレイするなど物好きな囚人もいるものだ」と興味をおぼえて来てみたら案の定だ」

……レイジに付き合わされたおかげで僕まで物好き扱いされた。不愉快だ。

無然と黙りこんだ僕と笑いを噛み殺すレイジとを見比べ、

小脇にボールを抱いた安田が言う。

「レイジ。君と鍵屋崎は仲がいいんだな」

「誤解です」

「まあそこそこ」

断固否定した僕の横からレイジがいらぬ口を出す。そんな僕らふたりの対照的な様子に何を思ったか、銀縁眼鏡の奥の双眸が和み、安田の顔に柔和な表情が浮かぶ。

その表情に、一抹の翳りが射したのは目の錯覚か？

「……そうか。友人ができたのか」

「彼が僕の友人だとしたら僕は辞書に記載された友人の項目を塗り潰します。僕の人間性を貶める発言は聞いて不快なのでよしてくれませんか」

「おま、貶められてるの俺だよ！」

レイジの抗議を無視して安田に詰め寄るが、安田が前言撤回する気配はない。手の中のボールに目を落とした安田が僕の顔に視線を転じる。

「返すぞ」

安田の言葉に迅速に対応、両手でボールを受け止める体勢を整える。安田があざやかに手首を返し、ボールを投げる。

「!! つ、」

顔面に衝撃、瞼の裏側で火花が炸裂。

理解不能の事態が発生した。僕が取り損ねたボールが顔面

を直撃、その衝撃で眼鏡が落ちて視界がぼやけた僕が膝をついた背後、無防備に突っ立ったレイジの両手に乾いた音をたててボールが挟まる。

「顔面でボールを受け取るなんてトリッキーなプレイどこで覚えたんだよ、すげーや天才！」と人の気も知らずに爆笑するレイジをよそに「めがねめがね」と口の中でくり返し地面をさぐる。

あった。レンズに付着した埃を丁寧に拭いとり、眼鏡をかけ直したその瞬間。

「……………元気でいてくれ」

安田の声がした。

衣擦れに紛れそうにかすかな呟きだが、僕の耳にははっきり届いた。眼鏡をかけ、正面に目を凝らし、身動きせずに焦点が定まるのを待つ。安田の輪郭が収束し、三つ揃いのスーツを着たエリート然とした風貌の男が目に映る。

聞き間違いのはずがない。安田はたしかに「元気でいてくれ」と告げた。まるでこれが永遠の別れになるように、今日を限りに東京プリズンを去るように未練を残した口調で。どういう意味だと聞き返すより安田が踵を返すのが早かった。安田を追おうかどうか躊躇した僕の背後でレイジが「ボールを顔面キャッチしたおにちゃんかつこわるーい」と笑い声をたて、怒りが瞬間沸騰する。

「恵の真似をするなど言ってるだろう！ 恵の声はもって可愛い、ヘリウムガスでも吸引して出なおしてこい！」

ボールを両手にパスしつつ距離をとったレイジに走り寄った背中に一瞬だけ安田の視線を感じたが、振り向いた時にはもう安田の姿は遠ざかっていた。

『元気でいてくれ』

普段の安田らしからぬ深刻な声音が脳裏に響き、胸騒ぎに襲われる。

あれではまるで、最後の挨拶をしにきたみたいだ。

死ぬかと思った。

「腹減った……」

今日もまた腹を空かせた囚人たちががやがやと騒がしい食堂。強制労働を終えた囚人たちが早いもん勝ちで席を争い、押しあいへしあいけなしあいでは取っ組み合いの喧嘩に及んでる。

猥雑な活況を呈した食堂の片隅、空腹感に苛まれてテーブルに突っ伏す。

今日は一日中ホセのマラソンに付き合わされた。だだっ広い中庭を夕方まで延々走らされて足が棒になった。疲れ知らずのホセは「いやはや、いい運動になりました」などとタオルで顔を拭きつつ爽やかにほざいていたが冗談じやな

い、全力疾走したところで先頭のホセとの距離は全然縮まらなかった。

初日なんだからもうちよっと手加減してほしい。

しかしレイジといいホセといい、東西南北トップの運動神経は化け物じみてる。喧嘩じやそれなりの場数を踏んで、体力にも多少は自信がある俺がホセの脚力と持久力には驚かされた。きつと肺活量がすごいだろう、ホセときたら「ファイトーファイトー」と叱咤しつつ酸素不足でふらついている俺の脇を走りぬけてくれやがった。つまりその時点で一周差がついてたわけだ。

一週間特訓を続けたところで俺がホセを追い抜く日がやってくると思えない。一瞬たりとも隣に並ぶのさえ不可能な現状なのに。

テーブルに突っ伏して死んでる俺の正面には鍵屋崎が座っている。何故かこつちも死にそうな顔色だ。顔に濃厚な疲労感を漂わせ、上品に味噌汁に口をつける鍵屋崎をテーブルに頬を預けただらしない姿勢で仰ぐ。

「なんかあったの。疲れた顔してるけど」

「昨夜、飲んで暴れた君に付き合わされて酷い目にあっただけかな」

しれつとうそぶいた鍵屋崎の言葉に途端に背筋が伸びる。はじめたように上体を起こし、テーブルに両手について

身を乗り出す。たいして美味くもなければ不味くもなく、味を感じてるのかさえ謎な無表情で味噌汁を啜る鍵屋崎に食ってかかる。

「……俺、本当に昨日にやったの？」

頼むから教えてくれと哀願の調子で訊ね、するような眼差しを注げば、不快な記憶を反芻したらしき鍵屋崎が眉をひそめる。なにその意味深な反応。酒を飲まされたあとの記憶がふつり途切れてるせいでレイジに真相を明かされた今も昨夜の行動に確証が持てない。頭を抱え込み自己嫌悪の泥沼に沈んだ俺を見下ろした鍵屋崎が、味噌汁から口をはなして何かを言いかけ。

「覚えてないなんて薄情だな。何百何千の大観衆が見守るリングの上で鍵屋崎の首にキスしたくせに」

「な……!?」

嘘つけこの野郎、と隣の席のレイジを罵ろうとして背中に冷水を浴びせ掛けられたような悪寒が走る。正面に座つた鍵屋崎の襟首を問答無用で掴み、トレイをどけてテーブルに片膝のせ、抗議する暇も与えずに

首筋を確かめる。鍵屋崎の首には青黒い痣ができていた。タジマの指の痕だ。しかしそれより何より注目すべきはその下の赤い斑点。キスマークだ。

「……………」
「やっちまったか。」

茫然自失の体で鍵屋崎の襟首を突き放し、脱力して椅子の背凭れに背中を預ける。

どうやら俺は酔った勢いでとんでもないことをしてかたらしい。いや、正確には自分から飲んだのではなく飲まされたのだがそんなの言い訳にもならない。鍵屋崎の首に昨日今日できたばかりの発色あざやかなキスマークがあるってこたつまり俺は鍵屋崎を押し倒して首にキスしたのか？何百何千のギャラリイが食い入るように見守るリングの上でよりにもよって男相手に鍵屋崎に強姦未遂を働いたのか？どうりで食堂に入ったときから、いや、廊下を歩いてるときから周囲の連中の視線が痛いはずだ。俺が通りかかるとそれまで談笑してた連中がぴたりと話を止めてこつちを凝視するし、何だか変だと思っていたのだ。自己嫌悪の泥沼に沈みこんだ俺の肩を叩き、笑いを嘯み殺した表情でレイジが励ます。

「そう気に病むなって、やっちまったもんはしかたねーだろ。おまえが東京ブリズンの全囚人が見守るリングの上でキーストア押し倒して体中あちこちにキスしてそれ以上のことまでしてかしたのは事実なんだがら。リングで公開プレイで公認カップルだ」

「タチの悪い冗談を言うんじゃない」

これ以上なく不愉快げに眉をひそめた鍵屋崎が、弛んだ襟捌りを直しながら付け加える。

「ロン、これは君につけられたものじゃない。レイジの冗談を真に受けるな」

俺じゃない？　じゃあだれにつけられたんだよ。

俺が疑問の声をあげるより鍵屋崎の隣のサムライが味噌汁の椀を置く方が早かった。トレイに椀の底を叩きつけたサムライが不機嫌な仏頂面で鍵屋崎に向き直る。普段感情を表にださないサムライが腹の底で燦る怒りと不快さを押し殺し、おそろしく物騒な眼光で鍵屋崎を射竦める。

「……だれにつけられたんだ」

「君には関係ないだろう」

「関係ないことはないだろう」

「食事中に話す内容ではない」

無意識に首筋をおさえ、サムライの目から痣を隠した鍵屋崎がそつけない話題を変える。実際サムライときたら鍵屋崎にキスマークをつけた人間を今すぐ斬り殺しそうな剣幕なのだ。気迫をこめた口調と真剣な目つきで詰問された鍵屋崎が、サムライの頑固ぶりにあきれたようにため息をつく。

「……ボイラー室に監禁されてるとき、凱の子分につけら

れた。念の為断つておくが合意の上の行為だ。君が口だしすることではない」

合意の上？　潔癖症の鍵屋崎が合意の上で、納得づくで凱の子分と乳繰り合ったってのか？

あつげからんとした鍵屋崎の台詞に仰天し、箸を取り落とした俺よりもさらに驚愕したのはサムライで、知らず力をこめていた手の中で箸が真つ二つに折れ碎けた。傍目に気の毒なくらい動揺したサムライをよそに鍵屋崎は淡々と食事を再開、育ちのよさを醸し出す上品なしぐさで音もたずに味噌汁を啜る。

「ともかく相手は俺じゃないんだな。あーよかった」

「よくはない」

安堵に胸撫で下ろした俺に無然とサムライが呟く。

「レイジ、おまえでたらめ言つて驚かすなよ。本気にしちゃまっただろうが」

「昨日のお返しだ」

昨日のお返し。昨夜、酔っ払った俺がリングに殴りこんで試合をめちゃくちゃにした挙句に仲直りの握手を強いた事実は直接レイジから聞かされたがてんで実感がわかない。レイジは昨夜のことをまだ根に持って俺が鍵屋崎押し倒したんだくだらないう嘘ついたのか。

意地悪な王様だ。

それはともかく、レイジとサムライが仲直りしてくれてよかった。レイジとサムライの仲直りに一役買い、酒に酔った昨日の俺もひとつは善行をしたと気がラクになる。東京プリズンの囚人が一堂に会した地下停留場のリングで握手させるのはやりすぎだと思わないでもないが、レイジもサムライもお互い頑固だし荒療治に踏みきらなきやあのままずっと平行線を辿ってた気もする。

レイジとサムライに関しちや問題ない。問題大ありなのは、酒に酔った勢いで参戦表明した俺と何故かそれに同調した鍵屋崎だ。

「……とんでもねーこと言っちゃったな」

「今さら後悔しても遅い」

次の試合のことを考えると頭痛がしてくる。箸を掴んだままこめかみにこぶしをあてれば、こんな時でもひどく冷静な鍵屋崎が眼鏡越しの双眸を細める。

「参戦表明はもう取り消せない。他の囚人には僕と君もレイジたちの仲間と認識された。君に関して言えば、何百という数のギャラリーの眼前で凱に宣戦布告した手前次の試合を辞退すれば臆病者だ腰抜けだと誹謗中傷されるのは確実。それを何とか知ってるか」

「何て言うんだ」

「自業自得」

なるほど。

「自業自得と後ろ指をさされたくないなら潔く有言実行しろ。凱にはこれまでさんざん痛めつけられてきたんだ、公式に与えられた復讐の機会を存分に生かせ」

神経質な手つきで眼鏡の位置を直した鍵屋崎に毅然と告げられ、その眼光の鋭さに生唾を嚥下する。これはもうお遊びじゃない、俺はもう引き返せないところまできちまった。

鍵屋崎の言うとおり深く腹を括るしかない。大丈夫、一週間ありや何とかある。俺には頼もしいコーチがついてるんだから。

口の中でくりかえし自己暗示をかけて椅子に座り直した俺の隣、レイジが席を立つ。

「お先に失礼つと。トレイ返してくる」

先に食事を終えたレイジがどつかの給仕よろしく片手にトレイを持ってカウンターに向かう。その後ろ姿を見送り、トレイを見下ろす。鍵屋崎と話しこんでたせいで遅々として食事が進まず、結果まだ六割が残ってる。時間切れになるまえに飯の残りをかつこもうと箸を握りなおせば背後に足音が接近。

「くそつ、半半と親殺しが何様のつもりだありや」

「レイジとサムライにケツ貸す見返りに守ってもらってる嬢ちゃん二人組が、凱さんに喧嘩売ってたですむと思っ

てんのかね。めでてーな」

「知ってるか、半半が東京プリズンにぶちこまれたワケ。ガキの抗争で手榴弾投げたんだよ。素手じゃ勝てないから手榴弾のピン抜いたんだ。くそつたれ台湾の血が半分入ってるやつあ腰抜けのタマナシだ」

会話の内容から察するに、俺たちに反感を持つてる凱の子分だ。

「ーちっ」

舌打ち。陰口には慣れてる。むきになれば相手を喜ばせるだけ、いちばん賢い対処法は無視だ。背後に接近する足音は聞こえぬふりでさあ飯をたいらげようと食器を抱え持ち、

味噌汁を頭にぶっかけられた。

「……」

正面の鍵屋崎が息を呑む。

俺の背後じゃ凱の子分二人組が笑ってる。俺の頭の上でひっくり返されたのはアルミの深皿で、俺の頭にぶちまけられた味噌汁が髪をぬらし顎から滴り上着を汚し、ズボンに染みて床にこぼれていた。味噌汁がぬるいせいで火傷しなかったのがせめてもの救いだ、ワカメを顔に貼り付け放心状態で椅子に座りこむ俺の周囲じゃ一部始終を見ていた囚人

どもがこつちを指さして爆笑してる。笑いすぎて椅子を蹴倒し床に転がりそれでもまだ笑い止まず、滂沱の涙を流して腹筋を痙攣させる。陸揚げされた魚がのうちまわるように周囲の囚人が笑い転げる中、鍵屋崎は箸を持ったまま硬直し、その隣のサムライが気色ばむ。

レイジはまだ帰ってこない。そうか、レイジがいない隙を見計らって俺に手をだしたのか。

レイジがいないなら安心だ、仕返しされるおそれもない、半半なら大丈夫だどうせ口だけだレイジがいないけりや何もできやしないんだから。

口の中が塩辛い。口に流れこんだ味噌汁の味だ。顔にへばりついたワカメを払い落とし、椅子を蹴倒して無言で立ちあがる。服には味噌汁が染みて濃い異臭が匂う。髪も服もべとついて不快でどうしようもない。

味噌汁の染みは手洗いで落ちるかな、と漠然と考えつつトレイにのったアルミ碗をひったくる。

お袋ごめん。言いつけ破る。

食い物粗末にするのは罰当たりだけど、もう我慢できねえ。

「味噌汁くせーな」

「床にこぼれたぶんも一滴残らず啜れよ」

そして俺は振り向きざま、背後に突っ立ってたガキの顔面にお返しとばかりに味噌汁をぶちまけた。

「!? ぶっ、」

「な、なにすんだこいつっ！」

顔面に味噌汁をかけられたガキがよろめき、その隣のガキが憤怒の形相で掴みかかってくる。油污れの目立つ食堂の床を蹴つてとびかかってきたガキに胸ぐらを掴まれテーブルの天板に背中を強打、俺が背中から倒れた衝撃でトレイが派手にひっくり返り食器が中身をぶちまけて宙に舞う。床になだれ落ちた食器が乱雑な金属音を奏で、たまたま近隣に居合わせた囚人の顔面に味噌汁の飛沫が跳ねて野菜の切れ端がへばりつく。

「調子のりやがつて！ 雑種は雑種らしく床に這いつくばつて犬食いしてろっ」

「人の頭に味噌汁ぶっかけるようなやつに食事作法指図されたかねえ、箸の握り方から覚えなおしてきやがれくそつたれが!!」

力づくで押し倒され、胴に跨られた体勢で唾をとばして相手を罵りながらテーブルを手探り、そばに転がってたアルミ皿を手繰り寄せる。

「ぎやつ!!」

今まさにこぶしを振り上げ俺を殴らんとしたガキの額に、手にしたアルミ皿をおもいきりぶつける。額を痛打された激痛にうめいたガキが体を起こした瞬間、両足を揃えて跳

ね上げて鳩尾に蹴りを入れる。鳩尾に蹴りを食らって吹っ飛ばされたガキがもんどり打って床に転落、床一面に散乱した食器が落下の衝撃に弾む。残飯にまみれたガキの連れが「くそつよくも！」と鼻息荒く突進。テーブルを背にした俺が紙一重で体当たりをかわせば、目標を見誤ったガキが加速した勢いでテーブルに乗り上げ、その巻き添えで鍵屋崎がもろに顔面に味噌汁をかぶる。

「ざまあみやがれ、凱の子分どもはボス猿ぞつくりで動きが鈍いな！」

「凱さんにびびってちびつてた腰抜けに言われたくねえ！」

「びびってなんかねーよ、その証拠にリングの上で決着つけてやる！」

事態はもう收拾つかない。

テーブルに乗り上げたガキが無関係の囚人のトレイを蹴散らして不興を買い、巻き添えで食器をひっくり返され飯にありつけなくなった囚人が逆上。「おれの飯を返せ!」「おまえに食わせるたくあんはねえつ」とはげしい口論があちこちで勃発。テーブルと床一面に食器と残飯が散乱し、怒号と罵声が飛び交う修羅場と化す。

堪忍袋の緒が切れた。味噌汁ぶっかけられて穏便なふりができるほど俺は人間ができちゃいない。

「なに勘違いしてんだ半半、てめえは今ここで死ぬんだか

「次の試合なんか出られるわきゃねーだろー！」

俺に味噌汁かけた張本人が再び突っ込んでくる。突撃、衝撃。床に転倒した俺の前髪を驚愕んだガキが目を炯炯と輝かせ――

『Stop-!』

騒動を静めたのは王様の一声だった。

カウンタ―にトレイを返却したレイジが高らかに手を打ち鳴らして解散を告げれば、床やテーブルで取っ組み合っていた囚人が憑き物が落ちたように大人しくなる。王様の影響力は絶大だ。王様の命令に逆らえる者なんてだれもいない。

床に仰臥した俺の頭上に立ったレイジが、意味ありげな流し目を食堂中央部にくれる。

「決着はリングに持ち越し。だよな、凱？ ギャラリーの眼前でロンぶちのめすの楽しみにしてたのに、でしゃばりな下っ端に先越されちやつまんねえよな」

食堂中央部のテーブルを占領しているのは凱とその一党。

中央テーブルから少し離れた場所で起きた騒動を宴の余興として飯食いながら見物してたらしい。上座に陣取った凱が、レイジに話を振られて不敵に鼻を鳴らす。

「……さっさと戻って来い」

凱に顎をしやくられた二人組が這う這うの体で戻ってゆく。

食堂を一望する上座にふんぞり返った凱は忌々しげにレイジを睨み付けていたが、床に尻餅ついた俺に視線を転じるや獰猛な笑顔になる。

「『リングで決着つける』。その言葉に嘘はねえな」

「……ああ」

尻をはたいて立ち上がり、反発をこめて凱を睨みつける。凱は尊大に腕を組んで椅子にふんぞり返っていた。巖のように筋骨隆々の体躯に殺気を凝縮し、嗜虐の予感に目を蕩かせて唇を舐める。

「逃げたら承知しねえぞ。どこまでもどこまでも追いかけてたっぶり俺様に喧嘩売ったこと後悔させてやらあ。お前が東京プリズンでようが関係ねえ、必ず見つけ出してケツ掘ってから殺してやるよ」

凱なら今言ったことを本気で実行しかねない。

だから俺は今この場できっぱり宣言する、凱と絶縁するために凱と決着をつけてやると。

「……ここ出てもお前に付き纏われるなんざうんざりだ。次の試合で綺麗さっぱり縁切ってやる」

食器と残飯がばらまかれ、味噌汁で足がすべる惨状を呈した食堂の床を踏み、等間隔に配置されたテーブルと東棟だけで何百人という囚人の頭を越えてまっすぐに凱を指さす。そうだ。遅かれ早かれ凱とは決着をつけなきゃいけない

た。

これ以上凱に付き纏われるのはごめんだ、俺はこれから東京プリズンで生きていきたい。東京プリズンで生き抜くためには強くなるしかない、レイジの背中に隠れなくても戦えると証明するしかない。

これは俺が生き抜くために避けて通れない一対一の喧嘩だ。東京プリズンにおける居場所をもぎとるための真剣勝負。

耳が痛くなる静寂に支配された食堂に、俺の宣戦布告が明朗に響き渡る。

「……格好つけるのは結構だが、その前に顔を洗ってきたらどうだ」

食堂に集結した囚人全員が固唾を飲む中、顔に味噌汁を浴びた鍵屋崎がなげやりに言った。

上着の裾で眼鏡を拭きながら。

とんだ災難だ。

この刑務所の囚人の食事作法が犬にも劣ることは重々承知していたがせめて物を咀嚼する間くらい静かにできないものか。一日の強制労働で疲れ果てているにもかかわらず何故喧嘩する活力が有り余ってるのか理解不能だ。きつかけはロンの応酬だが、そもその元凶はロンに味噌汁をかけた囚人だ。

以前のロンなら余程のことをされても耐えていた。油污れに照る床に膝をつかれ、囚人に蹴られた食器を追ってあちこち這いまわる羽目になっても、発作的暴力に及ぶような短慮な行動は慎んでいた。昨夜の宣戦布告を経てロンにも心境の変化があつたのだろうかと勘繰ったが、本人のとぼけた様子からしてまったくこれっぽっちも覚えてない可能性が強い。

勝手に人の意志を代弁して参戦表明をしたくせに、なんて人騒がせな人間だ。

ロンが味噌汁をかけ返したせいで、食堂は目も覆わんばかりの惨状を呈した。テーブルで床で、食堂のあちこちで囚人たちが取っ組み合い罵り合い派手な喧嘩に及んだ。ひっくり返ったトレイと中身をぶちまけた食器が滝のように落下した床で乱雑な金属音を奏で、僕もその巻き添えで顔面に味噌汁をかぶる羽目になった。

受難だ。受難続きだ。

レイジの介入で一件落着いたのだが、どうせなら僕に被害が及ぶまえに仲裁に入ってほしかった。僕が味噌汁を顔面にかぶり、まだ全部は食べてなかったトレイがひっくり返された頃に登場されても素直に感謝できない。どころか、何故今ごろ登場するんだ焦らしに焦らしてロンに恩を売ってるつもりかと下心を疑いたくもなる。

それと言うのもレイジの人間性に信用がおけないからだ。とりあえず、味噌汁を顔にかぶり食事を中断された僕は早々に席を立つた。残飯まみれの床に死屍累々と倒れた囚人の惨状を呈した食堂にこれ以上居残っていてもどうしようもない。覆水盆に帰らず。ひっくり返ったトレイは元には戻らない。

食堂から帰ったその足で洗面台に直行し髪と顔を洗った。服も洗った。執拗に手で擦っても味噌汁の染みはなかなか落ちずに苛立ちが募った。外にいた頃は洗濯は家政婦に任せていた、自分の手で私物を洗うという行為が習慣化したのは東京プリズンにきてからだ。鍵屋崎の家では戸籍上の両親は研究に講義にと忙しく、とても家事にまで手が回らなかつたのだ。鍵屋崎優の助手として研究に加わっていた僕も例外ではない。ここに来るまで僕は自分の靴も洗ったことがなかつた。自分でやってみて初めて、手揉み洗いも結構むずかしいんだなと実感した。新発見だ。夕食後は自由時間だ。

強制労働から解放された囚人が廊下や階段の踊り場や自分の房で、賭けや読書や猥談や各自の趣味に耽るこの時間帯が東京プリズンは最も騒がしい。鉄扉越しに廊下の喧騒を聞きながら、味噌汁の染みを洗い落とした上着を見下ろし、満足の吐息をつく。完璧主義な性格ゆえか、神経質な性向

ゆえか、たまたま目についたほんのちよつとした汚れでも完全に落とさなければ気が済まないので手洗いを終えるのに時間がかかった。

蛇口を締め、水を止める。力をこめて水を絞り、パイプベッドに接近。吊るす物がないので、パイプベッドのパイプに上着をかけておく。

これでよし。あとは乾くのを待つだけだ。

一仕事終えた満足感と爽快感に額を拭う僕の背後、サムライはその存在を忘れさせる静けさで黙々と墨を擦っていた。今日もまた日課の写経に励んでいるのだ。

ペア戦参戦表明をしたところで、東京プリズンでの日常は変わらない。

周囲の囚人の態度が若干変化したぐらいのもので、僕自身の生活に多大な影響がでたわけではない。少なくとも、現時点では。

それはともかく、今日のサムライは何故だかいつも以上に近寄り難い仏頂面をしている。食堂の一件からずっとこうだ。さっきの会話のどこが気に障ったのか理解不能、意味不明だ。僕がボイラー室に監禁され凱の子分にキスマークをつけられたと話した時からずっと不機嫌に墨をすり続けている。

「何が気に障ったんだ。延々墨をすり続ける奇行で現実逃

避するくらいなら率直に話してくれ、傍で見ていても不気味だ」

「気に障ってなどおらん」

「嘘をつくんじゃない、なんだその眉間の皺は。鏡を見てみろ、今の君はこの上なく不愉快な顔をしてるぞ。不愉快な君と沈黙を共有する僕こそ不愉快だ。沈黙の相乗は相手を不快にさせるだけだ」といひ加減気付け」

指摘され、ますます眉間の皺が深くなる。サムライは本心の読みにくい仏頂面だが、この頃は僕の前ではよく感情を表すようになった。半年付き合ってみればひどくわかりやすい男だ。凛と背筋をのぼし、端然と正座した姿勢で手前後させ墨をするサムライの背中に歩み寄れば、僕の方も見ずに返事を返す。

「……男に気安く肌をさわらせるなど警戒心がたりん」

「ボイラー室の一件がへそを曲げた原因か？」

「接吻の痕のことだ」

「古いな。キスマークといえ」

現代、「接吻」などと口にする日本人はサムライくらいのものだ。遅れてきた武士らしく堅苦しく古臭い物言いに失笑すれば、墨をおいてこちらに向き直ったサムライが憤然と言う。

「おまえは迂闊すぎる。合意の上だか何だか知らんが、こ

こは外とは違う。……本当に惚れてもいない人間と安易にそういう行為に及べば必然自分の身を危険に晒す。平気で自分を粗末にする真似は感心しない」

「僕を守って自分をぼろぼろにした人間が言っても説得力がない」

間髪入れず返せば、痛いところを衝かれたサムライが渋面をつくる。

「……あれはやむをえん。友を守るために死地に赴かねば武士の誇りが貫けん」

「矛盾してないか？」

ややわざとらしく咳払いしたサムライが、真剣極まりない顔でまっすぐに僕を見据える。

「……もつと自分を大事にしてくれ、直。でなければ俺も戦い甲斐がない」

『守り甲斐がない』

最後の台詞が、僕にはそう聞こえた。

寡黙で口下手なサムライが珍しく長文をしゃべる。ひどく真面目な顔つきで、ひとつひとつ言葉を吟味して、自分の気持ち正しく僕に伝えようと不器用なりに努力してる。サムライは感情表現がへただ。東京ブリズンに来るまでずっと剣一筋の人生で過酷な修行に耐えてきて、身内以外の人間とは触れ合う機会がなかったのだから無理もない。僕と

て似たり寄つたりの環境で育った。

本当に心を許せる人間はただひとり、恵だけ。サムライにとつて苗がそうであるように。

サムライの気持ちはよくわかる。痛いほどよくわかる。半面、どうにもやりきれないものを覚える。

眼鏡の弦に手を触れ、できるだけ平静を保ち、ひややかにサムライを見る。

「何か勘違いしていないか。僕はもう『手遅れ』だぞ」

そうだ、僕は既に手遅れだ。売春班での一週間でさんざん複数の男に弄ばれた身だ。耐え難い日々の記憶は鮮明に脳裏に焼きつき、寝ても覚めても何をしていても肌を這いまわる手の感触が体と心を責め苛む。

「既に十数人の男に抱かれた身だ。今さら他の男と寝ようが体が汚れようが抵抗はない。必要とあらば誰とでも寝る、僕はもうそうして生きてくしかない」

ボイラー室でのあれは仕方なかった。必要に迫られての行為だ。僕は最も効率的な手段を採用しただけで、あの時あの場になかったサムライにとやかく言われる筋合いはない。それを聞いたサムライが悲痛な顔をした。サムライは優しい男だ。僕が虚勢を張つてることがわかって、僕が本当は自己嫌悪に押し潰されそうなことを知って、他人の心の痛みに敏感に物憂げな表情を浮かべているのだらう。

サムライは優しい。

だから時々、いやになる。耐えられなくなる。今の自分か、はじめでしようがなくなる。

だからつい、口を滑らせてしまったのだ。侮るように嘲るように。

「君は苗にもそう言ったのか。他の男に肌を見せるな、他の男と口をきくな、節操がないぞと口うるさく。意外と独占欲が強いんだな。苗は君にとつて姉的立場の人間だろう、弟みたいに思っていた人間に小言を言われるのは不愉快」

ずりりがひっくり返り、床一面に漆黒の墨汁が広がった。

「……、」

サムライが衝動的に立ち上がった反動ですずりがひっくり返り、墨汁が床を染める。胸ぐらを掴まれ、窒息の苦しみを味わう。外では日常的に真剣を握つてたせい、サムライの握力は強い。床から足裏が浮く体勢で吊られ、驚愕の表情でサムライを見上げる。

サムライは激怒していた。

感情の読みにくい仏頂面でいることが多いサムライが、今は怒りをむきだしている。その全身に迸るのは、不浄の血にぬれた刀を払えば巻き起こる風めいてなまぐさい殺気。

猛禽の双眸に憤怒を煮え滾らせ、痛苦と慙愧とが入り混じつた正視に耐えないほど悲痛な表情で、サムライが口を開く。漏れたのはかすれた声。

「二度と言うな」

「? ……なにをだ」

僕は混乱していた。何故これほどサムライが怒るのかわからない、激烈な反応の意味がわからない。どの個所が気に障ったんだ? 意外と独占欲が強い? それとも……

『苗は君にとって姉的立場の人間だろう、弟みたいに思っていた人間に小言を言われるのは不愉快―』

憑き物が落ちたようにサムライの指から力が抜ける。

小さく嘆息し、サムライが背中を翻す。そして、常になく取り乱したことを恥じるように顔を伏せる。

「俺はただ、これ以上お前に傷付いてほしくないだけだ。

お前はもう十分すぎるほど傷付いた」

再び正座したサムライが尻ポケットから手拭いを取り出し、床に這いつくばって墨汁を拭き取る。こんな時でも几帳面な男だとあきれる。サムライと背中合わせに屈みこみ、拭く物がないかと周囲を捜せば写経用の半紙が目に入った。半紙を手に取り、床の墨汁を吸わせる。墨汁が染みた半紙を見下ろし、呟く。

「僕は悪くないぞ。謝罪もしない」

無言のサムライにうしろめたさを覚え、俯く。

「だが、今のは失言だった。僕は天才だから凡人に頭を下げなどしないが犯した過ちは謙虚に認める」

苗の名前にサムライが過剰反応するのは無理ない、それだけ苗はサムライにとって大切な女性だったのだから。苗を侮辱したレイジを殴り飛ばした僕が同じ過ちを犯した皮肉に思い至れば、背中合わせのサムライが手際良く墨汁を拭きながら言う。

「ならば今度から他の男に気安く肌を見せるな。くりかえすが、お前は警戒心がなさすぎる」
説教にむつとし、陥穽を指摘する。

「『他の男』とわざわざ限定したということは、君になら肌を見せてもいいんだな」

「! なっ……、」

「そういう意味だろう。違うのか」

「断じて違う。俺に男色の趣味はない、男の肌など見てもつまらん」

「君も男だな。やつぱり女性のほうがいいのか。レイジにさんざん童貞呼ばわりされていたが真相のほどは」

「ゲスな詮索に答える義務はない」

ふと振り返れば、サムライの横顔が赤く染まっていた。この手の話には免疫がないらしい初々しい反応だ。別にサム

ライの初体験がいつで相手が誰だろうがどうでもいいが、サムライの精神的優位に立てる機会などそんなに僕はさらに追及しようと。

「囚人集合!!」

廊下で大声が響いた。なんだろう？ サムライと顔を見合わせ、二人して廊下に出る。看守の指示に従い、囚人が廊下に整列。僕とサムライも二人して列に加わる。

「上から連絡事項。喜べ、いい知らせだ。睡眠薬支給の認可がおりたぞ」

僕たち囚人を廊下に並べた看守が告げた台詞に、いつだったか安田に聞かされた内容を思い出す。夜もよく眠れない囚人のために希望者には睡眠薬を配ろうと検討中で、僕はその試験台として睡眠薬をもらったのだ。囚人の睡眠に配慮した良心的提案は安田の取り計らいで実現に至ったらしい。

「睡眠薬が欲しい奴は医務室へ行つてその旨伝えること。」

念の為言つとくがこつこつ貯めて睡眠薬自殺なんぞ考えるなよ、てめえら罪犯してぶちこまれた囚人がラクに死ぬのうなんぞ虫がよすぎだ。よっぽど不眠症に苦しめられてる奴じゃなきや認可がおりねえらしいからその点は大丈夫だろうがな。おいそこ、油性マジックで目の下塗つて寝不足の限つてろうとか話してんじやねえ、しつかり聞こえてるぞ」

警棒で肩を叩きながら看守が説明し、一列に並んだ僕たちを見まわし最後に付け加える。

「現実には地獄なんだ。せめて夢の中じゃ楽しめるといいな」

にやりと笑い、あとはもう用はないと手で追いたてて看守が解散を告げる。その足で医務室へ直行する者、それぞれの房に戻る囚人、廊下に居残りトランプゲームを再開する囚人と解散後の行動はさまざまだ。「睡眠薬かー」「俺あとでもらつてこよ」「寝過ごして点呼に間に合わなかったら睡眠薬のせいにすりやいいのか」「ばーか。それで勘弁してくれるわきやねえだろ」……おもいおもいの感想を述べつつ立ち去る囚人を見送り、サムライと一緒に房に引き返す。

「貰つてこなくていいのか」

「後でいい。今は囚人で混んではずだ」

僕がよく眠れないことを気に病んでたらしいサムライに訊ねられ、そっけなく返す。

「睡眠薬の効き目は折り紙つきだ。よく眠れないときは君も試してみればいい」

「？ まるで飲んだことあるような口ぶりだな」

「それは、」

そうだ。サムライには安田に睡眠薬をもらったことを言つてなかった。手錠を外すため、見張り役の囚人に口移しで

睡眠薬を飲ませたことも。

睡眠薬を飲ませた数秒後には僕の膝の上でいびきをかいていた四人の寝顔を思い出し、口元に自然と笑みが浮かぶ。愉快さを噛み殺しきれずに浮上した笑み。

「実際に飲んだのは僕ではないが、モルモットで試したところ効果抜群だった」

サムライは釈然としない顔をしていた。

+

深夜。そつとベッドを抜け出す。

パイプにかけた上着はまだ完全には乾いてないが、贅沢は言えない。生渴きの袖に腕を通し、裾を下ろす。スニーカーを履く。隣のベッドに視線を転じる。サムライはよく眠っているようで、かすかに規則正しい寝息が聞こえてくる。サムライの安眠に配慮し、物音をたてぬよう慎重にドアへと向かう。

廊下には冷え冷えと蛍光灯が輝いていた。囚人が寝静まった廊下はおそろしくしんとしてる。消灯時間を過ぎて外を出歩いているのがばれたら処罰は避けられないが、僕は運が良いらしく深夜徘徊を看守に咎められたことはない。それ

に今の時間なら医務室も空いてるはずで、行列に並ばなくても睡眠薬が手に入る。効率を重視するなら多少の危険を犯しても深夜に医務室を訪ねるのが賢い。

医務室に行つて戻ってくるまで、急げばそう時間はかからない。

東棟の廊下を歩き、渡り廊下に至る。前回はこの渡り廊下を渡りきったところで凱たちに遭遇した。看守よりむしろ警戒しなければならぬのは、階段の踊り場や物陰などで話しこんでる囚人だ。僕と同じく消灯時間を過ぎてても寝つけない夜行性の囚人はたくさんいる。

緊張して渡り廊下を渡る。周囲に注意を配り、いつどこから何が飛び出てきても対処できるよう身構えていたが、幸い何も起こらなかった。渡り廊下を渡り、中央棟に到着。医務室の方角に足を向ける。

『何か勘違いしてないか。僕はもう『手遅れ』だぞ』
脳裏に響くのはさっきの自分の言葉。自嘲の台詞。

『既に十数人の男に抱かれた身だ。今さら他の男と寝ようが体が汚れようが抵抗はない。必要とあらば誰とでも寝る、僕はもうそうして生きてくしかない』

苦いものが口の中にこみあげる。今ごろになって、自己憐憫に酔つて自暴自棄を気取った自分の言動に吐き気をおぼえる。確かに僕は手遅れだ。すでに十数人の男に犯されて

体も心もぼろぼろに擦りきれた。

しかし、自分で手遅れだと認めたらおしまいだ。

サムライが戦い続ける限り、僕に抗う気力がある限り、決して手遅れなどではないと信じなければ僕がやってきたこともサムライがやってきたことも全部無駄になるじゃないか。

僕もベア戦参戦表明をした。これからはサムライと共に戦うと決意した。

自分の身は自分で守る。そんな単純で当たり前のこともできない僕など、鍵屋崎直を名乗る資格がない。恵の兄でいる資格がない。僕は強くならなければ。サムライの足手まといにならないように、サムライにあてにされるように――

その為にはまず、自分の身を守る方法を学ばなければ。

僕の武器はこの天才的頭脳だが、いざ押し倒されたり絞め殺そうになった時などいくら知能が高くてもうにもならないと昨日嫌というほど学んだ。のみならず、レイジのボールを奪取するのさえ不可能な今の状態ではまた窮地に陥ってサムライの足を引っ張るだけだ。

最悪の事態が発生した場合にそなえ、自衛の術を身に付けておいて損はない。

一連の思考過程を踏み、結論に至った僕の前方に医務室のドアが現れる。しばらく歩き、医務室に到着。さて、あ

の耄碌医者はまだいるだろうか？ 噂ではほかに家族もお

らず、東京プリズン敷地内の職員宿舎に寝泊りしてようだから中にいる可能性が高いが……そう考え、ドアをノックしようとしてぶしを掲げ。

「本当にやめるのかね」

中から声が聞こえてきた。しわがれた医師の声だ。

おもわずノックを引つ込め、中の声に耳を澄ます。

「……ああ。私はもう、東京プリズンにいる資格がない」

「そんなに思い詰めることでもないと思うが……」

医務室には先客がいるらしい。医師とふたりきりで何やら深刻に話しこんでる。

「既に辞表は書き終えた。あとは所長に提出するだけだ」

「きみがいなくなると寂しくなる。常連をひとり失うことになるからね」

「刑務所の職員が医務室の常連になるなど誉められたことではない」

「こんな職場環境で精神を病まないほうが異常だと思うよ。不眠症は罪悪感の証明だ。こんなことを言っても説得力はないだろうが、ワシも診断を偽るたびに良心の呵責に苦しんでおる。いくら看守に脅されたからとはいえ、骨折を捻挫と偽り指のヒビを何でもないと偽り負傷した囚人を強制労働に向かわせ……」

医師の懺悔に驚く。

僕たち囚人のことなど何も考えず、見て見ぬふりの自己保身を最優先するように見えた医師がそんな風に思っていたなんて。彼もまた人間だったということだろう。

「きみと懇意にしてる囚人には悪いことをしたよ。なんと言ったか……かぎや……かぎや？」

「鍵屋崎。鍵屋崎 直」

突然自分の名前をだされ、心臓が跳ねあがる。

ドアの向こうでは平然と会話が續いてる。廊下に立ち尽くした僕の存在には気付かず。

「そう、鍵屋崎。ここに来た最初の頃、イエローワークで怪我をして訪ねてきたのだが指のヒビを適当に診て返してからというもの嫌われてしまつてね……。どうにも信用されてないようだ。無理からぬ話ではあるが。しかし、彼もたった半年でずいぶんと逞しくなつた。こないだ手首を捻挫した友人を担いで来たときは驚いた。このヤブ医者めと怒鳴られてしまつたよ」

「悪気はないが思つたことをすぐ口にだす性格だからな」
医師の話し相手が苦笑する。僕のことをよく理解してるよ
うな口ぶりだ。

「半年あれば人も変わる。特にこんな環境では変わらざるをえない。……徐徐に表情豊かになつてゆく彼の変化を見

届けられないのは少し残念だが、それもこれも私が撒いた種だ」

この声、聞き覚えがある。平板に落ち着いた口調、教養深い声。

「今まで世話になつた」

「君も元気で。睡眠薬が欲しくなつたらまたいつでも来てくれ」

「はるばる砂漠を越えてか？ 睡眠薬を手にするまに夜が明けそうだな」

冗談めかしたやりとりのあと、話し相手が席を立つ気配。何かに気付いた医師が「おつと」と声をあげる。

「背広を忘れてるよ」

「……私としたことが迂闊だつた」

心臓の動悸が速まり、喉が緊張に乾く。いやな予感に胸がざわめく。この声、つい最近どこかで聞いた。

今日の昼中庭で、僕が落としたバスケットボールを拾つて。

『……元気でいてくれ』

その瞬間、僕はノックもせずドアを開け放つた。廊下で立ち竦んだ僕に医師がぎよつとして椅子から腰を浮かし、その手から背広を受け取ろうとしていた男がこちらに向き直る。

オールバックにした髪、銀縁眼鏡の奥の伶俐な双眸、皺ひ

とつないスーツ。副所長の安田がそこにいた。

「どうということだ」

混乱のあまり敬語を使うのを忘れていた。どうということだ
一体、今の会話はなんだ？ 目に映る光景が理解できない。
いや、頭が理解を拒んでいる。僕に注意を奪われた医師の
手からすると背広が落ち、床に広がる。背広の内ポケット
トからこぼれ落ちた封筒の表には、はつきりところ書かれ
ていた。

僕とよく似た、右上がりの潔癖な筆跡で。

『辞表』

辞表……辞職？

安田が辞職する？